

昭和戦後期の太宰府と政治

——元太宰府市長有吉林之助氏談話速記録——

(解説) 有馬 学

ここに掲載する「有吉林之助氏談話速記録」(以下「速記録」と略す)は、太宰府市初代市長であった有吉林之助氏へのインタビュウの記録である。インタビュウは太宰府市史近現代編にかかわる調査の一つとして、平成七(一九九五)年五月に二回にわたって行われた。インタビュウの一部は、後述するように『太宰府市史通史編』に利用されているが、全体が公開されるのは今回が初めてである。なおこのインタビュウがきっかけとなって、有吉氏は平成十年三月の第40回太宰府講演会において、「昭和30年太宰府町・水城村合併のころ」と題する講演を行っている。

有吉氏の自筆年譜によると、氏は大正八(一九一九)年三月三十一日に太宰府町三条に生まれた(以下履歴については「速記録」による以外は同年譜を参照した)。「速記録」にあるように生家は地主で、有吉氏は太宰府小学校を卒業後、筑紫中学校に進み、昭和十二(一九三七)年に県費生としてハルビン学院に入学した。

偶然に過ぎないといえはその通りなのだが、後世の目から見ると、有吉氏の個人史における節目は近現代日本の激動の節目と驚くほど符合している。生年は第一次世界大戦のパリ講和会議が開かれた年であり、筑紫中学校に入学した昭和六(一九三一)年の九月には満洲事変が勃発、ハルビン学院入学の年の七月には、長く続く日中戦争の発端

となった蘆溝橋事件が起こっている。

このような現代史の激動と符合する有吉氏の前半生は、一見それと断絶しているように見える戦後の氏の経歴にも影響を及ぼしているといえる。氏はハルビン学院を卒業後、満鉄調査部に勤務し、昭和十九(一九四四)年にモスクワ留学のビザ取得のために東京待機中に空襲に遭い、千葉に疎開中に敗戦を迎える。やむなく帰郷した氏は、戦後改革の激動の中で革新的な青年グループと新生会を結成して町政の改革を訴えた。これが氏と太宰府町政との関わりのきっかけなのである。

「速記録」にはいくつかの興味深い山場があるが、その最初ものがハルビン学院・満鉄調査部時代である。ハルビン学院ははじめ後藤新平の肝いりにより、外務省所管の日露協会学校として大正九(一九二〇)年に創立され、昭和八(一九三三)年に文部省令による専門学校ハルビン学院に改組された。ロシア語を主要教科とし、日口(日ソ)関係の専門家養成を目的とした学校である。のち昭和十五年には大学に昇格し、満洲国立大学ハルビン学院と改称されている。

有吉氏はハルビン学院に福岡県の県費生として入学している。福岡県は四十名中五名の県費生を出しており、最も多かったという。そもそも有吉氏がハルビン学院を志望した理由の一つが、筑紫中学校の朝鮮満洲修学旅行(昭和十一年)であった。このあたりに、われわれは

当時の福岡県民の意識における大陸との近さを見るべきだろう。

ハルビン学院に限らず、戦前期日本が植民地、租借地、いわゆる満洲国などに設置した高等教育機関の歴史的位置については、まともな考察の対象になったばかりである。ハルビン学院についても、最近になって芳地隆之『ハルビン学院と満洲国』（新潮社、一九九九年）が刊行された。それによると、特に満洲国立大学になって以降は、関東軍の影響下に対ソ調査の専門家養成という傾向が強くなっていく。そうした事情もあって、ソ連侵攻後にスパイ容疑その他で抑留された卒業生は、二八三人にのぼるといふ。他方で、戦後日本のロシア語教育・研究において旧ハルビン学院の教師や卒業生が果たした役割も少なくない。たとえば上智大学のロシア語科が旧ハルビン学院の人材の継承と卒業生の寄付によって設立されたことは、比較的よく知られている事例である。また近年著名になった出身者として、リトアニア領事館時代に、ナチスドイツの迫害を逃れるユダヤ人にビザを発給して救った杉原千畝は、日露協会学校の一期生である。その杉原も、ハルビン特務機関の勤務歴を持つ元軍人であり、かつ満洲国の外交官としての経歴をもつ。

このようにハルビン学院は、〈外地〉にあつた他の高等教育機関と同様に、きわめて複雑な性格をもつ存在であつた。有吉氏が語るハルビン学院も、その一端を示す貴重な証言である。同時にそこには、後の眼からは僅かな偶然によって左右されているとしか思えない、人間の一生の不可思議さがかいま見えている。有吉氏自身が語るように、農業学校への進学を強く主張していた氏の祖父が亡くならなければ、筑紫中学への進学はあり得なかつたであろうし、ハルビン学院入学も満鉄入社もなかつたであろう。満鉄時代のソ連留学決定後に赤紙が来

たために、早とちりして入営準備に髪を切らなければ、上京もビザの取得も順調にいったかもしれない、しかしそうなれば前任のモスクワ留学者のように、敗戦後にスパイ容疑で抑留されていたかもしれないのである。このような体験が、有吉氏のその後の人生観に何の影響も与えなかつたとは考えにくい。

ハルビン学院から満鉄調査部という有吉氏の前半生における重大なトピックは、太宰府町・太宰府市という地域社会の歴史と直接の関わりはないように見える。だがわれわれが太宰府の地域史を語るときに、「速記録」の中の町議選や町村合併、農協活動や市制施行にだけ注目すればいいと考えるのは間違いである。地域社会の歴史は、それぞれの背景をもつて社会を形成した、有名無名のさまざまな人々が営んだ生活の集積である。われわれは戦後町政の革新運動に、農協運動に、町村合併に取り組んだ人々が、どのようなバックグラウンドをもつて生きてきたのかについて、全く関心を払わずに地域の戦後史を語ることはできないのである。

さて「速記録」の第二の山場は、これまであまり知られていなかった戦後初期における太宰府町政の革新運動であろう。とりわけ、昭和二十一（一九四六）年夏の光明寺での会合に始まるとされる新生会の活動は、きわめて興味深いものである。女性メンバーを含む青年層を中心とした新生会は、戦後第一回の町長選挙に際して、有力者の町政による無投票を批判して対立候補を擁立し、敗れたものの既成の秩序に挑戦する意思表示を行ったのである。これがきっかけとなって、有吉氏自身が昭和二十二（一九四七）年の町議会議員選挙に立候補し、地縁・血縁の網の目が張り巡らされた既成の地盤を背景とせずに当選するのである。

新生会の活動を中心とする戦後初期の政治状況については史料がきわめて乏しく、「速記録」は貴重な情報源である。『太宰府市史通史編Ⅲ』（二〇〇四年）の記述においても活用されている（森山優氏執筆部分）。有吉氏の証言は、太宰府天満宮前宮司の西高辻信貞氏が新生会メンバーであったことなど、エピソードにも富んでおり、生彩あるものとなっている。新生会と西高辻氏とのかわりについては、森弘子『西高辻信貞 わがいのち火群ともえて』（太宰府天満宮、一九八八年）に記述があり、おそらくこれが同会にふれた唯一の例と思われる。これらに加えて、戦後の供出の実態や農協活動の実際、闇米で儲かった農家の尺祝い（百円札を積み上げて一尺に達した祝い）など、戦後地域社会のディテールにわたる有吉氏の談話には興味つきないものがある。

「速記録」の第三の山場は、昭和三十（一九五五）年の町村合併から市制施行に至る、現在に直結する時期の町政の諸相である。有吉氏はこの時期に町議として筑紫郡旧御笠部町村合併推進協議会のメンバーをつとめ、また農協組合長、太宰府町助役を歴任、昭和五十七（一九八二）年の市制施行とともに初代市長に就任している（昭和六十二年退任）。

この時期は、さまざまな基盤整備がなされ、ベッドタウンであり文教都市であるという、今日の太宰府市につながる方向性が確立していく重要な時期である。学校建設、水道事業、住宅開発、大学を中心とする学校誘致、道路整備など、福岡市の近郊都市としてのインフラ整備がなされ、その中から徐々に「歴史と文化の町」という地域イメージが立ち上がってくる。町議として、また助役としてそれらのプロセスに中枢で関わった有吉氏の証言は重要である。われわれは氏の証言

によって、個々の事実を知るだけでなく、今日に至る地域社会の大きな流れをつかむことができる。この部分も、『太宰府市史通史編Ⅲ』の記述に活用されている。

それ以前の部分と同様に、ディテールに富む有吉氏の話は、ここでも興味深いエピソードに事欠かない。たとえば、合併以前の町議会の議場は、議長と町長・助役が床の間を背にして二十二名の議員が座る、二十二畳の座敷であったという。こんなことは、教えてもらわなければほとんどの人が気づかないだろう。しかも、通例はもめるもとである合併後の議員定数の削減がスムーズに行われた主な理由は、何と議場である座敷に座りきれないというものだった。

町村合併に際して、実現直前まで進んだ七か町村合併が挫折した主な理由が新市名問題であったという事情も、詳細に明らかにされている。「太宰府」町案に対して、最大の財政規模を持つ二日市町が反発し、太宰府町、水城村を除く五か町村で筑紫野町が成立してしまったのは、二日市町に対する事前の根回し不足だったのではないかというのが、有吉氏の観察である。もう一つ付け加えると、市制施行にあたって人口推計の誤算から若干の混乱が生じている。その要因は太宰府町が積極的に誘致した女子短大の存在であった。短大生の多くは住民票を移さないため、基本台帳に基づく町当局の計算では、市制施行に必要な五万人には達していなかった。しかし国勢調査は現住人口で算出されるため、短大生もカウントされて実際には五万人を突破していたというわけである。

有吉氏は市長退任後、長年にわたって古都太宰府を守る会の会長をつとめられた。談話を通して氏の生きてこられた道のりを振り返ると、それはさまざまな偶然を乗り越えてある種の必然に達したもののよう

にも見える。われわれは氏の語りを通して、戦後の太宰府という地域社会が、さまざまな困難を乗り越えて地域のアイデンティティを獲得していく過程を確認することができるのではないだろうか。今後の行政における〈哲学〉の必要性を語りつつ、自らはボランティアで協力していくと述べられる有吉氏の談話は、多くの示唆に富んでいられると思われる。この「速記録」がさまざまな場面で多くの方々に活用されることを願うものである。

（ハル濱はハルピン、ハルピン両様に表記されるが、本解説ではハルピンと表記した。）

（ありま・まなぶ 九州大学大学院比較社会文化研究院教授／市史編さん委員）

【凡例】

（1）本速記録は、平成七（一九九五）年五月八日および同月二十二日に、太宰府市役所四〇二号会議室において行われた有吉林之助氏へのインタビューのテープを起こしたものである。インタビューの参加者は次の通りである。有馬学（九州大学大学院比較社会文化研究科教授、肩書きは当時のもの、以下同じ）、森山優（日本学術振興会特別研究員）、日比野利信（太宰府市市史編さん室嘱託）。

（2）地域在住者でない読者にわかりづらい語句については註を補い、本文末に掲載した。また、その作成に利用した文献については巻末に一括して掲載した。

（3）明らかな事実の誤りについては、その脇に「」で訂正を記した。

（4）テープ起こしについては日比野利信の指導のもと、花田明子・城島奈美子（ともに当時、九州大学文学部学生）が行い、有吉氏の校閲を経た。また本文の調整および註の作成については内山一幸（現、太宰府市市史資料室嘱託）が担当した。

平成七(一九九五)年五月八日 有吉林之助氏聞取調査(第一回)

○有馬 録音を一応とらせて頂いてよろしいでしょうか？

○有吉 ああ、どうぞ、どうぞ。

○有馬 いろいろ聞き漏らすこともございますので。まず一番に伺いたいのは戦後の合併、それから市制施行の頃ですね。そのことをちよつと伺いたいんですけど。それだけではなくて、せっかくの機会ですの
で、ずつとお住まいになつて覚えていらつしやる昔の話を何でもして
いただくかと思つていまして。まあ、ちよつと一代記をしゃべつて
いただくかという感じでお願ひできればありがたいなと。我々は何も
知らないもので、いろいろ初歩的な質問もするかも知れませんが。

○有吉 私個人の関係でもいいんですか？

○有馬 ええ、ええ、勿論です。

○有吉 そういう資料は、親父の代からまだ、個人に関するものは出して
いないんですよ。

○有馬 はい。

○有吉 また所有田畑の総合表とか、納税関係書類とかたくさんある
んですけどね。そういうのも参考であれば、持つてきてもいいんです
けどね。

○有馬 そうですか。是非よろしくお願ひします。

○有吉 ちようどですね、明治の終わりから大正、昭和の初めですね、
その頃の資料があるようですよ。私の父の個人のものなんですけどね。

○有馬 あの、代々お宅は地主さんでいらつしやつた……。

○有吉 そうですね、地主、中小地主ですね。で、農地解放で八、い
や六反でしたか、ですから所有できる最高が決められていましたので

その他は全部手放してしまいました。太宰府は大地主はあまりおらん
かったですねえ、中小地主が多くなって。

○有馬 お宅はどのくらい土地はお持ちだったんですか？

○有吉 そうですね、はっきりは三町くらいじゃなかったでしょう
かねえ。それくらいのもですよ。

○有馬 大体田圃ですか？

○有吉 ええ、田圃です。

○有馬 三町ぐらいついていうと太宰府はどうですか？

○有吉 もう、中小の方じゃないですか。一番大きいのはですね、宮
司家と鬼木さん。鬼木つていう家があるんですよ、五条に。それに
しても大きな面積の方じゃなかったですねえ。まあ十町未満くらい
じゃなかったでしょうかねえ。

○有馬 ああ、そんなもんですか。

○有吉 ええ。大きな地主さんはいなかったと聞いていますがねえ。

○有馬 三町ぐらい、三町ぐらいとしてどうですか、やつぱりだいた
い小作に出すわけですか？

○有吉 そうですね、ほとんど小作でした。それで、なんて言いましょ
うかねえ、私の小さい頃はですね、小作争議とか小作人との人間関係
が大変で、地主には地主組合つていうのもあったようでした。夜
親父が出て行って、いろいろ対策を話し合つていたことを、おぼろげ
ながら覚えています。ええ、その当時はやはり耕地整理についてです
ねえ、溜め池を修理したり、農道を拡幅したり、畑を田にしたり、耕
地整理をしたりするのが、地主が主導でやりましたのは覚えてます
ねえ。お祖父ちゃんが腰弁当を持つて耕地整理に出かけている姿を小
さいながらもですね、覚えてます。

○有馬 争議、小作争議のご記憶なんてのはございます？

○有吉 いや、それはありません、ええ。

○有馬 有吉さんのお宅の田圃が争議にひっかかったということはなかったわけですか？

○有吉 それもね、はつきり覚えてませんね。私の記憶には、そういう争議の記憶はないですね。

○有馬 太宰府で、やっぱり少しはありましたでしょ、争議が。

○有吉 あったと思いますねえ、お祖父ちゃんから聞いていましたから。米の価格が上がった時なんか、米屋を打ち壊したりですね、そういう話も聞いていますねえ。

○有馬 ああ、そうですか。

○有吉 ええ、ええ、そういうふうに聞いていましたねえ。それから、地主の所にも押しかけて来たんじゃないですかねえ。

○有馬 ご家族っていいですか、お名前のリスト。頂いた資料にも関係があるんですけれども、いろんなお名前の方が出てくるんですが、この林太郎さんというのは？

○有吉 お祖父ちゃんです、私の。

○有馬 お祖父さんにあたるわけですね？

○有吉 ええ。

○有馬 お祖父さんは町会議員をされていましたね？。

○有吉 ええ。

○有馬 お父様は町政にはご関係になったんですか？

○有吉 そうですね。父は養子でしたし銀行員だったので、直接行政に関係したことはありません。林太郎には遅くまで子供ができなかったので、それで双養子もつこをしましてね、そして隠居になって何年かして

私の母が生まれたんですよ。それで私の今おります土地に、三条の上の方から分かれて隠居家を建て、本家は双養子の有吉伊八とセツが継ぎ、先祖祭をもらったんですよ。近所から養子、親父をよんで新しく建てた隠居で、祖父母と父母の四人生活が始まったわけですよ。

○有馬 ああ、そうですか。

○有吉 ええ。サラリーマンでした。最後は福銀③の春日原支店長なんかで辞めましたけど。

○有馬 ああ、そうですか。

○有吉 ええ。だから農業の方も、僅かな自作をお袋がやってましたね。私はハルピン学院から満鉄に入りまして、終戦後、ここに帰って来たんですよ、仕事がないもんですから。それでお袋がやってた農業の手伝いをしてましたが、素人の百姓と言われましてねえ、全然百姓したこともないものですよ。一年ぐらいいましたかねえ、そういうのを。その後、農業会に入ったんですよ。農業会はマッカーサー命令で解散させられました。そこで新たに農業協同組合の設立の事務的な仕事をしましてね、それから、農業協同組合の職員となり、助役になるまで農協の参事を続けていました。助役の時は組合長でしたけどね。後から知ったんですけど、お祖父ちゃんは小金を貸してたようですね。たくさん貸し付けた書類が残ってるんですよ。

○有馬 ああ、なるほどね。

○有吉 ええ、急速っていいですかね、金に余裕ができてきて田圃を買った、田を担保に金を貸した、担保流れで田を手に入れたり、購入したりして、お祖父ちゃんが一代で産をなしているようですね、ええ。調べてみますと、祖父以前はあんまりわからない。もう、本家の方に入るとかもあるもんですからねえ。分かってきたもんですから祖父以

前の過去帳は本家にあるので、あんまりはつきりわかんないんですけど。

○有馬 ハルビン学院っておっしゃったんで、学校のことをちよっとお伺いしたいんですけど。この辺りですと、だいたい生まれてからずっと今のお宅のところまで……。

○有吉 はい。

○有馬 そうすると、当時ですと小学校はどちらの方へ行かれたんですか？

○有吉 太宰府小学校⁽⁵⁾です。それから筑紫中学校⁽⁶⁾へ行きましてね、そしてハルビン学院。ええ、県費生という制度がありましてね、東亜同文書院と五名ずつ県費の支給制度がありまして、ハルビン学院五名と東亜同文書院五名、それに受かったもんですから。

○有馬 それは東亜同文書院とハルビン学院に県費で出すっていうのは、福岡県はずっとやってたんですか？

○有吉 そうですね、各県から一名とか二名とかですね。福岡が一番多かったんですよ、五名ですからね。だから全国から集まってまして、そうですね、出してないところもあったでしょう。一クラス四十名だけでしたからねえ。九州は熊本に大分、福岡ですねえ。それと鹿児島でしたか、それくらいでした。東北の方はあんまりなかったですねえ。

○有馬 有吉さんの頃で、中学校へ上がる人っていうのはどれくらいいたのですか、小学校、同じ小学校から。

○有吉 私の頃から急に多くなりまして十名でした。筑紫中学校ができて私どもが五回目ですけれども、ほとんど修猷館⁽⁷⁾とか朝倉⁽⁸⁾とかですね、遠かったものだからね。私どもは十名でしたねえ。一番景気の悪い時でしたけれどね。

○有馬 何年になりますかね、大正八年ですよ、お生まれは。そうすると中学へ上がるのが……、何年頃になりますかね、昭和……。

○有吉 昭和六年です。その頃はですね、もう大学を出ても職がないという不景気な時でしたし、「お前は長男だからもう家で百姓せい」と、「百姓するにはもう大学へ行く必要はない」と、「高等学校やら大学へ行くと、もう誰も地元におらなくなる。お前は長男だから、よそに出て行ってもらっちゃ困る」とお祖父ちゃんはですね、「福岡農業高校⁽⁹⁾に行け」と言われてたんですよ。それで、私もそのつもりでいました。小学校の六年の暮れにお祖父ちゃんが死んだんですね、十二月に。それで、皆中学校に行くでしょ。私一人で別の学校に行くのが寂しいもんですから、親父に「中学校に行きたい」と言ったら、「よし行ってよか」と言うもんですからね。その時、お祖父ちゃんがまだ生きとったら、私の人生は全く変わっとったかもしれませぬね。

○有馬 しかし、ハルビン学院に……。

○有吉 ああ、なぜハルビン学院に行ったのかと考えてみますと、第一に前に修学旅行でハルピンまで行った経験があったこと。それに先輩がおったんですよ。しかも当時国内におっても就職難だったですしね。狭い日本には住めないというわけで、皆、どんどん渡ってましたね。今から考えると親がよく許したと思うんですけどね。行けと言ってくれましたから行ったんですけどね。しかし、長男だから帰って来なあかんぞ、という念は押されてましたけどね。

○有馬 何年頃ですか、ハルビン学院へ行かれたのは。

○有吉 十二年です。

○有馬 昭和十二年？

○有吉 ええ。

○有馬 ああ、そうですね。そうしたら行かれた年に盧溝橋事件ですよね？

○有吉 そうです、はい。急速に世の中が変わりはじめました。戦争が始まったりなんかしましてね、私が中学校に入る時からもう、変わってましたですね。というのは、今まで制服は夏は霜降り、冬は黒で、外套はですねダブルの外套でした。ところが私どもからですね、靴は編み上げ靴になり、制服は葉っぱ葉服になったんですよ。夏も冬も同じ色の葉っぱ葉服に。で、我々から「何で、葉っぱ葉服に変えないかんのか」とだいたい中学校の頃、不服を言ったんですけどね。全県下一斉に夏冬とも葉っぱ葉服になってしまいましたねえ。そういうことが段々いろんな面が増えてきたようです。

○有馬 ハルピン学院は何年で卒業ですか？

○有吉 三年です。

○有馬 三年制ですか。どういう科があるんですか？

○有吉 科はありません。普通の高専並で外国語はロシア語が主で中国語が副でした。対露関係の人材養成っていうのが主たる目的でしたね。後藤新平さんが創立者です。最初は日露協会学校と言っていましたね、外務省所管のですね。その後、四年制の満洲国立大学ハルピン学院になり終戦を迎えました。ほとんど満洲内の満鉄とか、電電公社とかですね、国際運輸とか、それから三菱とか住友とか三井とかの商社会社の満洲駐在ですね。卒業四十人のうち、満鉄が一番多かったですね。満鉄には十人近く入りました。私は満鉄の第三調査室というソ連専門の調査室に配属されました。

○有馬 当時、入られた当時のハルピン学院っていうのはどういう雰囲気だったんですか。やっぱり、だいたいそういう対外関係の仕事を

将来しようって感じの人が多いわけですか、学生は。

○有吉 ええ、ほとんどがそうでした。入学当初は非常に自由な学校でしたですねえ。ただ、それも一年生の時だけでした。非常に自由を尊重する三澤校長¹⁰から軍人校長に代わってから変わりました。二年生からですね、ええ。軍を退役した少将とか中将の人が校長とか、学監とかに入ってきて、だんだんと締め付け教育が強くなってきました。いっぺん、寮のストライキかなんかがありましたねえ。私たちが一年生の時やったんですか。だんだんそういう締め付けが始まったので急に反発したのだと思います。四分の一世紀しか続いていませんから、ハルピン学院は、二十五年間で幕を閉じてます。一九二〇年、大正九年ですか、創立がですね。

○有馬 語学教育はかなり徹底してやるんですか？

○有吉 そうですね、ロシア語教育は徹底してましたですね。ロシア人の先生は何人もいましたね、日本語を全然知らずにいきなりロシア語で教えるものですから大変苦労致しました。

○有馬 だいたいそうすると、卒業するとまあ、何とか喋れるくらいに……。

○有吉 ええ、卒業までにはね、何とか喋れるようになるんですけども。二年からロシア人のところの下宿するんですよ、皆。それで喋るのが上手になってきましたね。しかし、私は会話は下手でしたけど。

○有馬 やっぱり下宿されたわけですか？

○有吉 ええ、下宿したんですけどね。寮の一年生だけ全寮なんですよ、二年から下宿していいんですけど。それで、ロシア人はもうとにかく自分たちは台所に寝泊まりして、母屋を日本人に貸すんですよ。収入はそれしかないんですからね。だからとにかく貸家、貸室の広告

がもうたくさん電柱に出てまして、それを目当てに行くんですよ。そしてきれいな娘さんがおるところは高いんですね、下宿料が。おばあちゃんだけるところはですね、安いんですよ。だからその高いところとだいぶん差がありましたけどね。どうしても娘さんがおるところは、皆が希望して行くでしょ。だから、我々は年寄りのおばあちゃんのところでしたけど下宿は一年で、世話人になったので寮の方に帰ってきましたね、寮生活の方が長かったですね。終戦後の日本の例のように、米軍人へ貸す、家賃収入で食ったというような状況でロシア人の生活は質素なものでしたね。ハルピンに八万人ものロシア人が住んでいました。

○有馬 ロシア人？

○有吉 ええ。

○有馬 だいたいやっぱり、概して白系の人は生活が苦しいわけですか？

○有吉 そうなんです。収入はほとんど自分の母屋を貸した家賃収入が主でしたし、また働きに出るとかいうことでしたから。もう日本語もすごく勉強してましたねえ、皆。

○有馬 ハルピン学院在学の頃はいかがですか。ハルピンにいて、例えばその日ソ関係の緊張感とかですね。

○有吉 ええ。それでもなかったですけどね。学院を出まして満鉄に入ってからもう、かなり感じましたですね。特にソ連関係を調査してましたから。調査って言いましてね、私どもが一番最初にしたのは、極東関係の各都市から新聞が入ってくるんですよ、地方紙がたくさん。そりゃもうだいぶ遅れて入ってくるんですね、どういう手順で入ってくるかわかりませんがね。それで、具体的生産量は発表しませ

んが、本年度は何%達成したと、一〇三%だったとか九九%だったとか、いろいろ出ているんですよ。で、昔、具体的生産量を発表した時代からそれをずうっと積み重ねていってですね、この工場がだいたい今どれぐらいの生産があるっていうのを推定する係が一班ありました。それからソ連の基礎調査班とか農業班とか工業班とかがあり、その中で極東班っていうのはそういうことをしてましてね。直接私は極東班じゃなかったですけどもいろいろ係の人の話を聞いてますとカード方式で進められていって、その、ハバロフスクならハバロフスクの中心街にレーニン像があつて、どういう通りがあつてですね、どこにどういう商店があるっていうのはカードに積み重ね調査していくとですね、だいたいの地図ができるっていうんですよ。そして例えば関東軍がハバロフスクに入った時にですね、目印のレーニン像があればこれは何の広場だと、それからどういふうになつてるとかいうですね、そういうことを地方紙の中から拾い出して、十何年かずつと調べていくんだそうです。私は直接その班に行ったことなかったですけど、ま、そういうことの調査の係が極東班という係でした。私も工業班っていうところで工業の生産状況をですね、いろいろ調べたり、中小企業と大企業がどういふうな関係になつていのかをですね、そういうのを調べてました。三年ぐらい経つた時、ある日突然一斉に、ゾルゲ事件ですか、尾崎秀実の事件ですね、調査部の偉い人がずるっと全部逮捕されてしまいましたね。九大におられた具島兼三郎^①さんなんかも私んところの第三調査室の次長じゃなかったですかねえ。課長じゃなかったですけどねえ。課長の次ぐらいでした。もう、私どもは入ったばかりでしょうが、それからもう、てんやわんやです。で、私どもの調査室は、大連におつたらそういうふうなこ

とでいかんから、関東軍のおる新京に来いと言われて、新京に移ってしましましてねえ。で、新京調査室と改称されました。だから大連に三年と新京に一年ですか。そして東京、終戦の時、東京だったんです。で、東京になぜ行ったかっていいますと、満鉄の調査室からですね、二年の期間でソビエトに留学する制度があったんです、ソビエト大使館に。それで東京外語の岡本¹²というのが帰ってきましたね、その後私に行つて来いということで行くことになったんです。そして間もなく赤紙が来たんですよ。そこで翌朝頭を丸刈にしまして調べて調査室に出勤したら、「お前なんで丸刈にしたのか」っていうもんだから、「赤紙来たらずぐ入隊しなければならず、頭の髪を長くしたままでは入隊できないのではないですか」と言いますと、「日本のためにソビエトに留学するんじゃないか。髪を切ったら外国に行けないんじゃないか」と言うんですよ。「そんなことは赤紙の方を優先することが常識です」と。いや、特命だから赤紙は取り消しということ即日取り消しになったですよ。そして「頭早く伸ばせ」って言うんですよ。頭そんな簡単に伸びません。それでビザの申請が、かなり順番遅れたんでしょう。「髪も大体伸びたし、お前の番になったから、東京にビザをもらいに行け」ということで、終戦の前の十月頃新京を出たんですよ、東京に。そして「今度はお前、今度はお前」って言われるけど、いつまで経つてもねえ、ビザが出らんですよ。そういうする内に東京で終戦、ビザは出らずじまいで東京で終戦でした。最初は長期出張扱でしたが、給料と出張手当と二重になるでしょ。それから満鉄も考えましてね、東京に東亜経済調査局っていう満鉄の調査室がありましてね、そこに替えられました。転勤の辞令は出しましたが、直接仕事割り当てられず、ぶらぶらぶらぶらしてました。翻訳はしてまし

たけどねえ、手伝いですよ、あくまでも。ビザがいつ出るかわからんもんですから。するとどうですか、二十年五月二十五日に大空襲、赤坂で大空襲をうけまして、焼け出されて千葉の方に、友達の家に転がり込んで暮らしました。それでも出らんんですからとうとう終戦まで東京にしまして、東京の焼け爛れるのをずうっとこの目で見てきました。そして敗戦でしょう。米軍のMPが満鉄の調査室やら諸施設など全部閉鎖しまして、出入りさせないですよ。ですからもう、行くところがないんですよ。満鉄はいわば倒産でしょう、行くところもないもんですから私は郷里に帰ることにしました。帰るところのない人は東京に踏み留まってですね、今もう全部引退してますけど、大学の先生なったり、外務省入ったり、大企業の調査室に入ったりしてるようですけどね。大学の学長になった人も居ります。私はもう、食べ物がないですね。白い飯は食べれないでしょう。配給されるのは大豆でしょう。大豆を昼飯にポリポリ窓際で食べるといふことで、米の配給はほとんどありませんね。だから物々交換なんです。で、田舎に行つて物々交換しなければ米や食べ物は手に入りません。私たちが持つてる物つて大した物はありません。農家から食べ物を手に入れることは、私どものような東京に地縁血縁のないものにとつては、とても困難なことでした。そのうち暴風雨で、山陽線が不通になりましたね、帰れなくなつたんですよ。一か月ぐらいかかったようですよ、復旧に。それで早速、八重洲口でずうっと並んで切符を買って、乗ったが最後、身動きできないんですよ。東京から三十六時間かかったですねえ、九州まで帰つて来るのに。で、広島でもう、どうもこうもならんから、窓から降りて用を果たし、プラットホームから原爆の焼け野原を見ました。ほうほうの体で帰つて来て、家に着いたら白い飯

をたくさん食べられるでしょ。こんな違うもんかと感激し、故郷のありがたさを楽しみ感じました。そこで今までの人生を振り返って見ますと、何か人生の節目っていいですか、なんかそういうのが何回かあるようですねえ。前にも話しましたように、それでもしお祖父ちゃんがもうちょっと、一年か二年か長生きしとったら筑中に入っておらなかったでしょうし、私はほんとに人生変わってしまったかもしれんですね。ハルピンに行かなければですね、また人生変わってしまったかもしれんですね。赤紙が来た時まず上司に相談に行っておれば頭を切る必要もなく、随分早くソビエトに行ってたかもしれんですね。既にソビエトから帰って来ていた岡本さんは、終戦時、新京調査室におったんですね。で、「お前はソビエトのモスクワ時代にスパイを働いた」っていうんで、ソ連に引っぱまえていかれてですね、鳩山首相の平和条約締結で三十一年ですかね、帰って来たのは。だから、十一年間、なかでもモスクワの地下監獄に九年も入ったって言ってましたもんねえ。同じ満鉄から留學命令を受けた岡本さんと私。早く帰って来とったために岡本さんは大変苦勞をしたんですよ。

○有馬 じゃ、一応ハルピン学院を出た人はやっぱり、ソ連軍が入って来た時には、いた場所によっては随分抑留されたり……。

○有吉 ええ。ハルピン学院っていうことで「お前、スパイ学校へ行った」っていうことでだいぶ痛め付けられたようですね。私は、そういうことで東京におったために空襲には遭いましたけど、そして焼け出されはしましたが、そういう抑留の経験がないんですよねえ。だから人生っていうのはですねえ、もう、ちょっとの事ですね、人生が大きく変わってくるんだと思いましたがですねえ。

○有馬 満鉄っていうのはだいぶ給料はいいんですか？

○有吉 いや、その頃はですね、満鉄が基準になってましたので、公務員のような形でしたねえ。

○有馬 ああ、そうですね。

○有吉 ええ、あまり給料的には良いとは言えませんでした。しかし厚生・福祉施設は整っておりました。スポーツ・文化施設、病院にデパートのような消費組合施設がたくさんありましたもんねえ。だから給料はそう良い方ではなかったですよ。私どもは初任給は七〇円ですからねえ、ええ。当時大学出は八〇円でしたね。大連は全然調整手当がつかないですよ。奉天とか新京とかハルピンに行きますとね、一割増とか二割増とか三割増とか手当が。割と物価は安定してましたし、安かったからですねえ。住みやすいのは安かったからでしょうねえ。そして、何ていうんですか、汚い仕事って言いますかねえ、そういうのはもう全て満人がしたでしょ。だから自動車の運転士とか電車の運転士とかそういうのも全部満人ですから。満洲の二世はですね、日本に来てはじめてですね、ああ、日本の人が運転士しているとかで、それでびっくりするということ。終戦直後、アメリカ人がですね、日本に来て生活していると同じような生活でしたでしょうねえ、満人からみますと。

○有馬 じゃ、やっぱりそういう大連辺りで育った人というのは、当時の日本人に比べると感覚がやっぱりだいぶ違う……。

○有吉 そうそうそう、だから「奥さんもううのはこらあ、二世はもらわれんばい」って言ってましたねえ。金銭感覚がどうも。サイン一つで何でも買えるでしょ。で、給料から引かれるわけですから。きたないきつい仕事、三Kの仕事はしないとかなですね。

○有馬 ああ、ああ、なるほどね、ええ。大連に住まれた方は、「割

といい街だ」って言う方多いですねえ。

○有吉 そうでしょ、ええ。住宅は良かったしですしねえ。

○有馬 戦後、太宰府に帰られたのはいつですか。昭和二十年の内に帰られたんですか？

○有吉 はい。二十年の十月頃帰って来ました。

○有馬 十月頃？

○有吉 ええ、ええ。十月頃帰って来ましたからねえ、もう、あつちからこつちから、戦地から外地から戦災地から若者が続々帰って来ましてねえ。村役場とか町役場が安定した職場でした、その頃はですねえ。ところが、ほとんどの若い人たちとか戦地に出してしまったものですか、役場にはもう、あんまり若い人は入ってなかったですよ。それで集会所もないんですからお寺に集まったりですね。そうして新生会っていうのを創りましてね、町政についてなんとかかんとか、やいやいわいわいと。まあ、若いもんが、何にも仕事ないんですからね、夜はそこへ集まってわあわあ言うてたんですよ。何もなしですねえ。酒もないし、肴もないし、ただわあわあ言うて帰る、あちこちの話題をわあわあ言うて帰る程度でしたけど。その内に、二十二年に普通選挙制度¹³ができ、初めて選挙が行われるようになってすなあ。齊藤廣路¹⁴さんっていう、福岡銀行の取締役をしてた人なんですけど、銀行マン、この人を初代の町長にしようっていうことですね、対立候補もなく、無投票のような形だったんですよ。それに新生会がわあわあ言いましたね、「せっかく女性にまでも、選挙権が与えられて普通選挙になったのに無投票とはおかしい」と。だから少なくとも一人対立候補を立ててですね、それぞれその抱負を聞いてから選ぶべきだと。いろいろ不満を持った、いわゆる若い連中がたくさんおったもんです

から、そこで、町長候補を立てて闘おうじゃないかっていうことになったんですよ。誰もですね、もう落ちるのはわかっとっからですね、口では言うけど誰もなり手はいないんですよ。そしたらね、私の友達の永光君¹⁵というのが、立とうっていうわけですよ。で、親父さんと齊藤さんっていうのは親友なんですよ。しかも同じ新町区の住人でしたね。「それがなんで対抗して立つか」って親父からやかましく言われて、「もう家は使ってはならん」って言われるわけですよ。だから裏から入れる蔵があつてですね、表には内緒にその蔵を選挙事務所にしてですね、皆で各部落を廻りましてね、そしたら役場の職員が、「そんな若い人が」、「二十八でしたもんねえその頃は」、「そんなに若い人が町長になったら役場の職員なんかもう皆辞めてしまう」って、「もう協力せん」っていうふうな話も伝わってきたもんですから。役場の職員が全部辞めてしまうなら我々が役場の職員になってもよいとか言いながら選挙運動をやつたものでした。それで選挙の結果はですね、私が今日もって来た資料の中にですね、投票の数が載ってますけど。

○有馬 ああ、そうですね。

○有吉 はい。あのずうっと歴代ですね、選挙の結果を全部書いてますので。その中にですね一覧表があります。総投票数約三一〇〇票中八〇〇票ばかりとつたですかねえ。それでね、その次の町会議員の選挙に誰がなる、誰が立つかっていうことですね、それで私が出ないかんくなったんですよ。町長に対立候補を出し積極的に選挙運動なんかしておらねば、まだ議員やらになつたらんでしようけどねえ。その時は二人新生会から出ることにしましてね。ところが、今度は私の本家から、しかも私の隣の本家¹⁶から三条区を代表して出ることが決まっております、「なんの若いもんがなんで隣から出るか」って、やか

まし言われました。それで私、「新生会から推されとうから三条区の票はいただきません、太宰府全域から貰います」。裏で親父とお袋が要所要所を廻ってですね、了解してもらってたようです。その時は二十二名でしたから、定員が。太宰府町だけで。

○有馬 こっちは町議会議員ですね？

○有吉 ええ、町議会議員ですね。私が一一八票で、本家の方が一〇九で。これですね。それでまあ後で往生しましてね。もう、村八分にならんばかりに。

○有馬 新生会っていうのは新しく生まれる会。

○有吉 ええ、新しく生まれる会ですね。前の宮司⑩なんかも入ってました。

○有馬 ああ、そうですか、へえ。

○有吉 前の宮司も入ったけど、途中からですね、氏子総代あたりから「神社が政治運動をしている誤解をうけるから」とか言うてね、「宮司入ったらいかんばい」って言われて、途中で脱退されました。

○有馬 これはそもそも新生会っていうのはいつ頃できたものですか？

○有吉 ええ、帰って来てからですから一年ぐらい経ってからです。二十二年、いや二十一年ですね、二十一年の夏ですよ。暑い頃、集まった経験がありますね。ええつとですね、光明寺に円田⑪っていうてですね、橋本⑫とも言い、ノモンハン事件で有名になった人ですが、その人が光明寺っていうお寺を継ぐためにですね、帰ってきましたね。その人の呼びかけで、お寺に集まって何か話し合おうじゃないかというところから始まったようですね、ええ。私どもより三年ぐらい先輩ですかねえ。

○有馬 やっぱり、当時は、誰かそういうふう呼びかける人が……。

○有吉 なかなか、中心になって呼びかける人が最初は口コミで知り合いに呼びかけたわけです、「集まってみろうじゃないか」と。

○有馬 で、どのぐらい集まったんですか？

○有吉 常時集まったのは二、三十人ですねえ。そして、メンバーとしては七、八十人はおったようですよ。

○有馬 やっぱり全体としては、なんか新しい戦後の改革っていうか……。

○有吉 そうですねえ、ええ。やっぱり当時の町政には、戦前のニオイがして万事独裁的なやり方で、民主主義っていうような形じゃなかったもんですからねえ。戦前は町会議員は、選挙で選ばれてはいましたが、町長は町会議員の推薦でしたからねえ。そして女性に選挙権ができたっていうことですね、ええ。

○有馬 その新生会には女性メンバーもいたんですか？

○有吉 ええ、いまだに元気な方もいらつしゃいますし。

○有馬 割とどこでもこういうような若い人のグループっていいいますか……。

○有吉 できたんじゃないですかね、ええ。それで若くして代議士やら県会議員なんかなられた方には、そういうグループから出られた方が多かったのではないですか。

○有馬 新生会は選挙っていいいますか、そういういわば政治的な活動っていうのは町長選挙なり町議会選挙で、例えば衆議院選挙の時に誰かを推すというようなことはなかったんですか？

○有吉 衆議院はそういうことはなかったですね、ええ。衆議院はあ

りませんでした、それぞれやっぱり主義、主張がだんだんはつきりしてきましてねえ、その時は一緒にわあわあ言っていましたけどねえ。離れて行く人、付いてくる人いろいろあって、県議もしてません。代議士もしてません。まあそういうことであんまり長続きはしてないんですよ。ただ残党はずっとおりましてね、何人かはずうつとこの太宰府に住みついております。

○有馬 新生会の場合はメンバーの中に例えば共産党系の人なんてのは……。

○有吉 共産党系はおりませんでしたねえ。

○有馬 ああ、そうですか。

○有吉 ええ。「お前たちはそういうものじゃないか」って言われたことはありましたね。あの、初代の森田久¹⁹という町長ですね、合併しからの町長。あの人が、塾を開いていましたもんねえ。最初は宮司邸に、後は文書館²⁰の裏に茶室っていうのがありまして、そこにずっとおられたんですけどねえ。その人から言われたことがあったです。「そんなことはないです」ってね、皆で押しかけていろいろ話したら、「うん、そうやないね、お前たちそうじゃないな」って。で、合併して初代の町長に森田久さんを推したのも私も推した、ええ。

○有馬 全国的に見ると戦後の割と早い時期に一時期共産党が伸びた時期があったんですけど、この辺りではそういう活動は特になかったんですか？

○有吉 そうですね、共産党っていうのはねえ、太宰府にはなかったですねえ。水城の方にはありましたけどねえ。太宰府はありませんでした。そして、合併してからですね。

○有馬 満鉄の調査部っていうのは大体マルキストが多く逮捕歴の経

験がある人が結構多いんですよ？

○有吉 そうですね、多かったですよ。私も知らなかったんですけどね。行ったらもう堂々とマルクスの『資本論』なんかですね、机の上で読めてましたからねえ、あの頃で。

○有馬 有吉さんなんかの年代だと、もう若い頃にそういうものに触れるっていうことはあんまりなかったですか？

○有吉 そうですね。国内ではもう、全然触れることができませんでした、ええ。で、満鉄に入ってからですね、あのいわゆる共産主義的な考え方を克服せないかん、という時代でした。高田保馬経済理論²¹っていうんですかね、そういう考えしかなかったものだからね、マルクスの資本論を知らずしてマルクスを克服するなんてあり得ないと。それでマルクスを読み始めたんですよ。で、それを克服せないかんっていう気持ちで全冊読み上げましたねえ。したらだんだん窮屈に、そして急に窮屈になってきたでしょ。だから一応は読みましたけど、ええ。

○有馬 まだ満鉄入ってすぐぐらいの頃だと、読む分には特に問題ないっていいですか……。

○有吉 なかったですねえ、ええ。もう一斉検挙からですよ。もう一切ダメになりました。

○有馬 それはもうかなりきつくなるわけですか？

○有吉 ええ。第一もう、机の上に置いただけでもう、引っ張って行かれるぞ、っていうふうなこともありましてね。みんなもう、しまい込んでしまったですねえ。

○有馬 また話が戻りますけど、戦後の町会議員選挙の時のことですけど、まだ二十代でいらしたでしょ？

○有吉 ええ、二十八です。

○有馬 やつぱり当時の選挙は若い人がだいぶ出てきたものですか？
○有吉 立候補は少なかったけれど、私の選挙は皆若い人ばかりでした。

○有馬 あ、そうですか。

○有吉 第一、隣から三条の推薦が出たしですね。私はもう全然入り込む余地がなかったから、若い人たちに頼む以外なかったもんですからね。

○有馬 そうすると普通の地域の選挙と違って、どっかの地区が固まってるってわけではないんですか。まあいわば全く地盤がない選挙で……。

○有吉 ええ、選挙の通も全然おらんでしょ。だからだいたいどうなってるかもわからなかったですよ。どこを頼りにしていいとかわからん、ただもう若い人が、各地区におる人がですね、ええ、うちは何票、うちは何票っていう程度を感じですね。

○有馬 どういう選挙運動だったんですか、当時は。

○有吉 そうですね、当時はマイクでしたねえ。いやマイクじゃない、メガホンですね、はい。もう自動車もなければですね、ポスターはどうでしたかねえ、第一回までポスター……、自分で描いてたようですねえ、「有吉林之助」とです。白紙に書いて選挙で検印してもらって……。もう忘れちゃったけどねえ、あんまり、大きなポスターはなかったから大きさはやつぱり決まっとったんでしょねえ。全部皆で書いたようでしたねえ。

○有馬 それで、メガホンで自転車かなんかで廻るんですか？

○有吉 ううん、いやあ、歩いてでしたねえ、ええ。

○有馬 歩いて全部廻るんですか？

○有吉 そうです。自転車でしたかねえ。有岡栄三郎⁽²²⁾さんのところなんか馬で、馬に乗ってですね、ポカポカ廻ってました。私は自転車は使ったかなあ。

○有馬 演説会なんかは、やるわけですか？

○有吉 演説会はですね、小学校の講堂で、全員じゃなかったですけどね、何人か行つて抱負を述べましたねえ。全員じゃなかったですよ。

○有馬 有吉さんは演説は得意なんですか？

○有吉 いやあ、あんまり……。

○有馬 でもまだ当時は演説っていうのはかなり意味があったんじゃないですか？

○有吉 そうですね。ただですね、今から考えますともうあまりにも若すぎましたからねえ、とんでもないこと言うもつたかもしれませぬえ。

○有馬 なんカスローガンがあったんですか？

○有吉 あの頃は物が不足して公正な配給つてのを望む声が強かったですねえ。物を公正に皆に等しく分けるといふ分配。生産なんていうのはちよつともう考えられん時でしたからねえ。急速なインフレは進んでますし、とにかくもう内部の皆で少ないながらも公平に分けようじゃないかっていう。特に戦中から、どうも依怙虫貞があるとかですね。砂糖にしる衣料にしる、それから味噌、醤油にしるですね、全部配給でしたしよ。そういうものがどうしても依怙虫貞になるんですが、「そういうことはいかん」っていうのがまあ、非常に強い皆の関心でしたからねえ。そういうのが一番じゃなかったでしょうかねえ、その頃は。二回目頃からだいぶ変わってきましたね。なんとか太宰府をですね、「こういう状況じゃいかんから、ああせないかん」とかで

すね、競馬場誘致論とかです。

○有馬 ああ、競馬場誘致論があったんですか？

○有吉 競馬場誘致論があったんです。小笠原⁽²³⁾なんとかっていう代議士が見えた時には天満宮のところにお連れして、現地を見てもらうようにしました。

○有馬 どうか予定地があったんですか？

○有吉 はい。今の太宰府遊園地から相撲場、そして今の国博予定地を含むところですね、この谷一体をですね。

○有馬 じゃ、あそこに競馬場ができてたら、ちよつと大変だったんですね。

○有吉 とにかくですね、学業院中学校⁽²⁴⁾を組合立で前はですね、金がないもんですからね。でも何としてでも各町村に中学校を創らないかんわけですよ。ところが金がないし場所もない。で、青空教室はしてるし。収入源・税源を血まなこで探しておった時代の思い出話です。

(A面終了)

○有吉 学業院中学の話が出ましたので少し話しますと、当時宮村女子商業⁽²⁵⁾というのがちょうど学業院中学校のところにありました。生徒が少なく教室が余っているということでそこを借りて、水城と太宰府の組合立の中学校を創ろうという話が進んだんですけど、その話がなかなかうまくいかないので水城の小学校の一部を借りましてね。二部教育、青空教室なんかもだいぶして当時の中学生には、大変迷惑をかけた。そしてら宮村女子商業のオーナーである宮村翁が、無償で寄付しようと、校地・校舎全部をですね、寄付しようってことになって、みんな大変な喜び様でした。そこを貰いうけて独立した学業院中学校になったというわけです。もう今全部建て替えていますけどねえ。

だからいまだに宮村翁を偲ぶ会、感謝する会がずっと続いているはずですよ。その当時、全部校舎と校地を寄贈してくれたんですよ。

それ以前の話ですが、太宰府には双葉山道場⁽²⁶⁾っていうのがありましてね。相撲さんが戦前、戦中来てたんですけれども、そこを売るというわけですよ。それで、そこが中学校用地にいいじゃないかっていうことで、いろいろ協議したけど金がないわけですよ。いい用地は用地だけでも買いきれなかつたんですよ。それで、水城の方からそういう話がありましてねえ、渡りに船⁽²⁷⁾ってことで組合立の中学校を創ったんですよ。旧太宰府町は産業もなし、参拝客も少なく、今のような観光客は全く考えられませんでした。私ども町会議員の年俸が七〇〇円か八〇〇円、一年間ですね。だいたいこれで全予算の規模がわかると思います。

○有馬 農業会の仕事をされるようになったのは町会議員在職のまんですか？

○有吉 そうですね。農業会に入ったのが先なんですね。

○有馬 農業会の方が先なんですか？

○有吉 ええ。そして農業会の解散と農業協同組合の設立の準備をしている時にですね、二十二年になって、町長選挙が先にあつてですね、その時やあやあ言ったもんですから町会議員に出ないかんようなことになったんですよ。それで組合長や専務に話したら、「よかろうもん、出れ」ということでしたから。在職のままですね。それでずうつと在職のまま、四期。

○有馬 当時の農業会の一番の問題は供出？

○有吉 そうですね。

○有馬 供出が一番？

○有吉 はい。供出、そしてその前の割り当てですね。まず割り当て、そして完全に一〇〇%供出することが一番でした。この割り当てがなかなか大変でした。割り当ては、役場の事務でしたけれども供出は全部完遂にしないと大変でしたから、農協も一番の仕事でした。

○有馬 そういうやり方はやっぱり戦争中のやり方をそのまんま……。

○有吉 そうですねえ、戦争中はどんなもんであったかよく私は存じませんけれども。反別と反収ですね。反収が問題なんですよ。川下の五条、この近所はよけいとれるでしょ。川上の方はあんまりとれないという感じで。それで反収を決めるわけですね。それがなかなか難しく、前年通りっていうわけにはいかんわけですよ。そこが政治的にやかましくてですね。それで、反収が決まれば反別は大体把握してますから、それに掛けて、種籾と自分たちで食べる農家の一年分保有米と差し引いた残りを供出するわけでしょう。それはもう図式が決まっちゃったからねえ。だからあらざらいい持つて行かれるというようなこと。反収がちよっとでも上がりますとね、よけい出さないかんといいことになるわけですね。そこがやかましかったですねえ。

○有馬 やっぱりまずその反収を算定する時に……。

○有吉 県の職員がするんですよ、その年々によって違いますからねえ。だからずうっと皆ついて行ってですね、依怙蟲頂のないよう、坪刈りをして反収の基礎を決めるんですけどね。坪刈りをするところをここが一番平均的な収穫であるところを見つけてるんですね。そして何か所かしましてね、それを平均して決めたものです。よけいとれた年もあれば、風とかなんとかでとれない年もあるんですから。だから反収、これがなかなかでしたからねえ。それと検見といましてね、隠し田

があるんですよ。これが山間部に行きますとちゃんともう隠してあるのがあるんですよ。それから畦畔面積って言いましてね、田圃の面積は一反でもですね、山手に行きますと段々畑があるから畦畔が多いんですよ。それで畦畔面積を一律に一〇%なら一〇%引きますと、実際の面積がすごく少なくなるわけですよ。この畦畔面積をですね、田圃一枚一枚なかなか完全に把握することは難しいからですね。平地部は少なく、山間部は多いということは判つても、一枚一枚いくらつていう字図なんてなかったからですね。そういう駆け引きがなかなかですねえ。だから各実行組合から一流のベテランが皆出てましたよ。だからできるだけ個別計算をしてですね、それで納得させるまでが大変……。

○有馬 やっぱり納得づくでやらないといけないと……。

○有吉 いや、最後は納得づくというわけにはいかない。やっぱりひどい時はあり、自分の飯米も出してしまわないと供出ができない時もありました。進駐軍が来ましたがもんねえ、終戦直後はですねえ。それで強制供出させられたようなこともありまして。

○有馬 やっぱり供出そのものは非常に強制力が強いものだから……。

○有吉 肥料配給とリンクされ、供出を側面から強制してました。肥料がありませんでしたからねえ、その頃は。だから、自分のところで堆肥を作ったり、下肥を入れたりなんかして、肥料となるものものすごい大切なものでした。ほんとに僅かの配給しかないような時代でしたから。だから闇肥料っていうのは高かったですねえ。闇米も高かったですけど。

○有馬 だいたい、供出はなんとか目標通り達成できたものですか？

○有吉 だいたい、太宰府はできました、ええ。強制供出させられたところは太宰府はなかったですねえ。筑紫野の山間部でありましたけどねえ。

○有馬 強制供出っていうのは、実際に行つて持つてきちゃうわけですか？

○有吉 そうです。家探しをするんです。自家に保有する米は全部見てですね、そして余裕の分は全部出させるわけですよ。

○有馬 太宰府はそういうことはあんまりなかった？

○有吉 ええ、強制供出はなかったですねえ、記憶はないようです。新聞沙汰で大きくなったのは筑紫野だったと覚えています。戦後一番荒廃して、やっと戦争が済んで、自由に生産されるようになりましたけれども、物がななし肥料がない。そういうことで生産が極端に落ちましたけど、だんだんに年が経つにつれて、少しずつ肥料も増産できてきましたけど、それでも闇米が非常に高かったですからねえ。農家はなるべく正規の供出は少なくして闇で売ろうというようなことで、一時、百円札を積上げて、「尺祝い」っていうのがあったんですよ。

農家ももうほとんどですね、闇米で。それで天満宮の夏祭りに、博多から当時有名な生田徳兵衛²⁶という博多仁和加のプロが来ましてね、夏祭りはどこでも仁和加が盛んでした。その時に面白いなと思ってるのは、徳兵衛さんが言うには「百姓さん、あなた方は今、金をたくさん持つてござるが、それは私たちが一時預けとりますとばい、今にみるとんなつせ、必ず取り返しに来ますけん」と言い、皆大笑いしたこと覚えてますよ。それほどですね、闇米やらで農家は皆現金を持つておつたことは事実です。尺祝いっていうのは、まだ千円札がなかった頃ですから、百円札で一尺積み重なると尺祝いっていうのがあったほ

どですね。皮肉なものです。現在は。農家はその金全部取り返されて、生田徳兵衛さんが言った通りになったんじゃないでしょうかねえ。

○有馬 やっぱそうすると、博多辺りから買いたしに来るわけですか？

○有吉 ええ。

○有馬 やつぱり、物々交換もかなり……。

○有吉 そうですね。だから農家るところに行きますとね、私のところにはもうそりゃあたくさんあるというふうでね。東京でもそうでした。千葉辺りまで買いたしに行きますとね、農家としては地下足袋が一番欲しかったようですね。当時地下足袋なんてものはなかなか手にはいらないうんですよ。だから満鉄で配給をうけた、運動靴のようなを持つて行きましたね。親指のところが分かれた地下足袋でなければ農作業に力が入らん。贅沢なもんでしたよ。まあ、力が入る地下足袋が物々交換で手に入るわけですよ。農家のところはそういうのがたくさんあつてですね、運動靴では駄目という訳です。まあ、そういう時代でしたね、終戦直後は。

○有馬 農業会が解散になり農協になつて、当時のといいますか初期の農協が一番課題にしていたことっていうのはどういふものでしたか？

○有吉 そうですね、太宰府では結局一番最初に信用の協同組合がいいですか信用組合ができています。全国ほとんど信用の協同組合が一番早かったですけど。明治二十二年に出た『太宰府町是』²⁷っていう本があるんですけど、その中に蔬菜栽培奨励とか植林栽培奨励とか種籾塩水選は協同で、塩を効率的に使いなさいと、七つばかり提言がまとめてありましてね、その最後に「庶民金融機関創設のこと」って書

いてありましてねえ。それで一番にできたのが、明治四十四年に北谷つていうところに信用組合が、北谷村つていうんですけど、そこにできて。それから明治四十五年松川に信用組合ができて、大正十五年に太宰府の信用組合が松川の信用組合と合併してできて、昭和十三年信用購買販売利用組合と改称され、昭和十八年北谷信用組合を合併、昭和十九年最終的に農業会つていう形になったんですね。それが昭和二十三年、戦時中の翼賛団体として解散になりました、そして農業者が主体の組合を創らないかんということになったのです。その頃は、太宰府町民の多くが信用組合員だったんですね。ところが農業協同組合になると組合員を正組合員と準組合員とに分けねばならず、最初から準組合員が多い農協となりました、太宰府は。だからそういう意味では、信用を中心にして、準組合のためにもなる、いわゆる協同組合つていう形のいわば信用組合的な運営つていうことをしないといけないのではないかということが一番の課題でした。太宰府のような小さな農業者のおるところでは、特産物も作れるところでもありませんし。そういうことで、農協経営つていう面からいいますと、信用を重点とせざるをえなかった。それで、農業協同組合の主体はあくまで農家であり、生産力を高めて農家の手取りが増えるつていうことが一番中心ですけれども。それにしても根付いたものはほとんどありませんねえ。奨励をしましたがほとんど根付いたものはほとんどありませんねえ。お茶もしたし、梅もしたんですよ。しかし続いてません。全部よそから入っていますからねえ。梅は、立花²⁸ですか、八女郡の方から来てますもんねえ。とにかく昔から太宰府は生産は少なくて消費が多いところ。前に話した明治二十二年の町是つていう今の町勢要覧みたいな印刷物の中に生産高と消費量が書いてあって、生産が消費を上まわる

のは黒字で、消費の多いところは全部赤字で出てんですよ。それを品目毎に一覧表にして、当時県内各郡内それぞれ町是・村是として出しており、特に太宰府はほとんど赤字ですよ。だから、蔬菜栽培奨励のこととかですね、いろんなことを謳つてますけど、なかなか長続きしなかったですねえ。「宰府千軒」と昔から言っていますので、とにかく旅館、それも簡易旅館が多かったですねえ、昔は。多くの人が太宰府に泊まったということでしょうねえ。

○有馬　すると、信用組合中心つていうことは、純粋な農業生産者以外の人からお金を集めるつていうことですか？

○有吉　そうですね。昔からそうだったからですね。それで飽き足らんつていうことで大分遅れて太宰府信用組合が別にできまして

ね、西日本相互銀行に吸収され、現在は西日本銀行²⁹となつております。

○有馬　生産面でいうとどうなんでしょうか、やっぱり肥料の問題つていうのは戦後の早い時期は大きな問題だったんですね？

○有吉　そうですね。肥料がなくてですね。もうとにかく物がほとんどなかったですからねえ。食べ物、着物、住宅については、戦争でやられてませんので太宰府はそうでもなかったですけどねえ。ただ都会が焼けておりますので入り込んで新しく住人になった方はたくさんおられました。

○有馬　農協の仕事はそのままずっとされてたんですか？

○有吉　最初から参事です。農協参事制をとっていました。農業者が主体の経営だからですね。経営には農家はいわば素人、だから理事会でしっかり経営方針は決めるけれども、経営は参事に任せようつていうのが農業協同組合の方針であつて、そういう参事制がありましてね。それで参事ですつとき、三十七年に水城村農協と合併して新

太宰府農協となり、四十一年に農協組合長に選ばれ、その任期途中で助役になったんですよ。

○有馬 そうすると随分長かったですねえ。

○有吉 農協には二十五年間勤め、その間十六年は議会議員と兼掌でした。合併の時も議員でした。四期もしたものですから後進に道を譲って農協に専念しようと思つてですね。それから八年間政治の方は休んでおりましたけどね、川辺町長になりましたね、思いがけず助役に懇請されました。合併の時はこれにありますように旧太宰府町だけで二十二名なんですよね。そして合併をして一期だけは太宰府区から十人、水城区から十人という小選挙区でやったですよ。そして二期目から二十人ということになってですね、それでこの時に、資料を見てもますと、「新町建設計画」というのがありますが、これにも議員はそれぞれ十三名というふうになつてくるようですね。それが「町村廃止分合申請書」というのがですね、これは合併の申請書の正式名称なんですけど、この時に議員が水城の方が十六人ですねえ。そして太宰府の方が二十二名。二十二名と十六名で合計三十八名です。三十八名では多すぎるからそれぞれ十三名になった。なぜ十三名なのか私もちょっと記憶がないんですけど。そして議員が一年任期延長になるんですね、合併推進の特例で。ですから任期は一年延びましたが三月一日に合併してみると三十八名集まるところがない。これでは一か年間議会活動はできないことがわかり、太宰府の昔の役場に三十八名、正副議長やらを決める。いわゆる議会構成を決めるために集ったんですよ。そして三十八名入れないんですよ。合併前の議場は座敷と次の間二十二畳で、そこにですね、町長と助役と私ども二十二名が座って、床の間を背にして議長と町長・助役が座るといふ形でした。

ところが合併したら三十八名でしょ。総勢四十一名入らないんですよ。それでどこでやるかっていうと公民館もないし、別に集まる場所もないわけですよ。お寺ぐらいいしかなないでしょう。それでこれは多すぎる、それぞれ十三名でも多すぎるということになったのです。だからそれぞれ十名にせざるを得なかったのです。幸い水城の村がちょうど大字が十ありましてね、十人、各大字から一人ずつ出して十人でしょ。太宰府は大字は三か所しかありませんよ。大字は北谷と内山と太宰府と。太宰府の内も、六町つていいまして、昔から六町と内山と北谷とで、八人でいいわけですよ。しかし高雄つていう五条から分かれた区があるし、松川区つていうのもあるので、水城が十で、太宰府も十でいいんじゃないかと。それで、それぞれ十に割とスムーズにしたんですよ。そして任期はもう一年も延ばす必要ないじゃないかと。三月一日に合併をして四月一日で二十名にしようじゃないかと。それで全員で辞職したんですよ。そして統一地方選挙にあわせたんですよ。しかし当初だけは小選挙区ですね、太宰府十名、水城十名でしょうつていうことで。この表を見たら水城は書いていないから、小選挙区当選者がわからなかったのだろうと思います。

○有馬 ああ、そういう意味ですね。

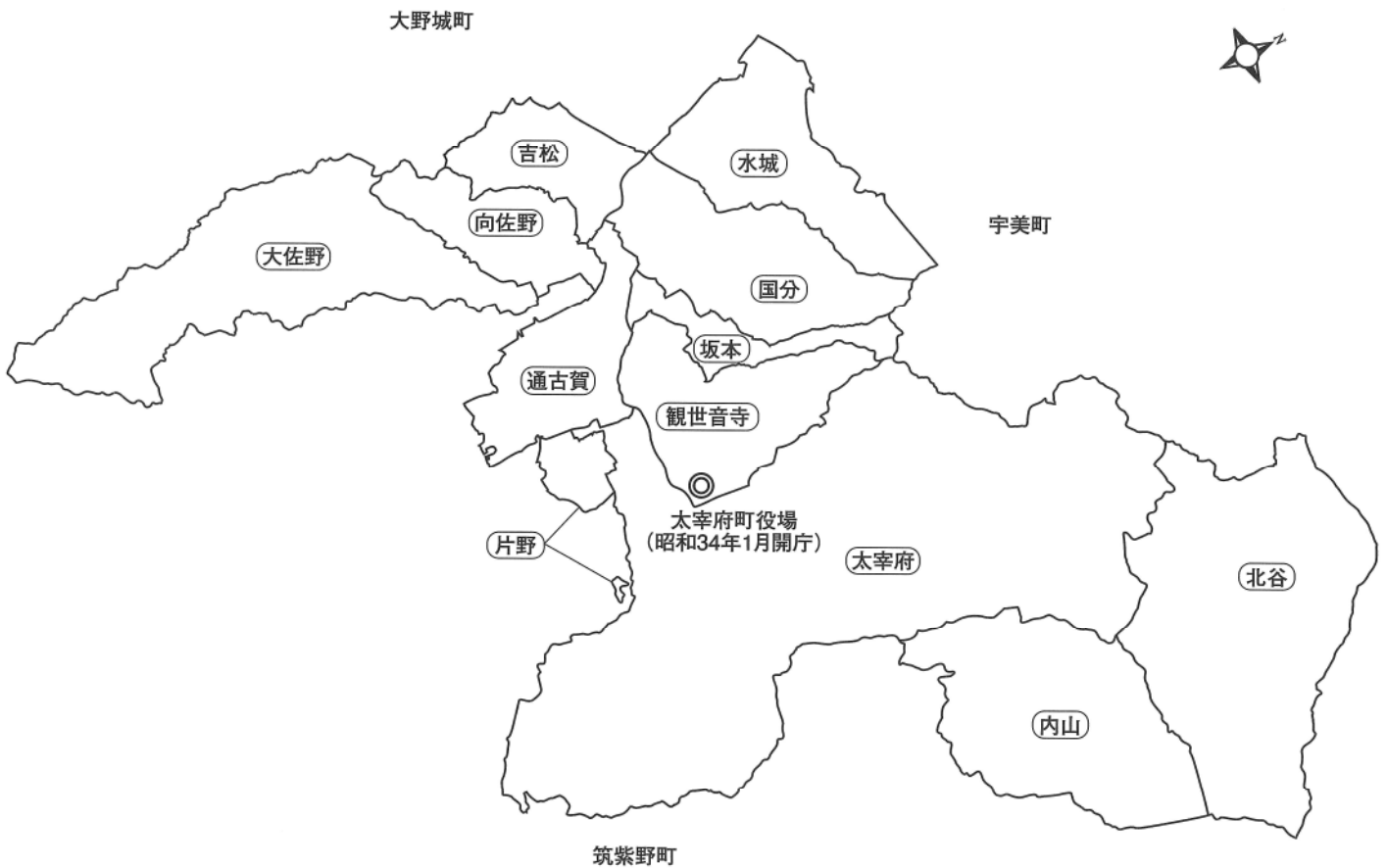
○有吉 そういう意味だろうと思いますね。そして二期目からですね、全町一区でやったのは。

○有馬 ああ、そうですね。座敷でやってたんですか。

○有吉 はあ、座つてですね、ええ。皆どこでもそういう似たようなもんですよ。現在のようない立派な議事堂など、どこにもなかったもんですよ。昔は。

○有馬 だいたい合併つていう考え方つていうか構想つていうのはず

【図】太宰府町の大字



註

- (1) 旧太宰府町（大字太宰府、内山、北谷）
旧水城村（大字観世音寺、坂本、国分、通古賀、水城、吉松、大佐野、向佐野、片野）
ともに明治22年4月1日に成立。
- (2) 有吉氏が言われる大字太宰府の門前六町は、三条、連歌屋、馬場、大町、新町、五条をさす。
- (3) 水城村の大字は9つであり、昭和30年4月の選挙では通古賀より2名当選している。

うつとあったものなんですか？

○有吉 そうですね、町村合併促進法というのが期限切れだったんですね。期限切れだから、とにかく三十一日までにしようじゃないか。というのは県から強い要請があつて、当初は七か町村合併っていうことですね、ここは。筑紫野市の五町村（二日市町・御笠村・山口村・筑紫村・山家村）と太宰府の二町村で七か町村合併だったわけですよ。私もそのときは財務分科会の委員をしてましてね。各町村の財政事情をずっと調べたものがありますけど。それで財政的にはやっぱり二日市が断トツで良かったですね。二日市が断トツで、あとはもう大なり小なりでしたから。とにかく財政的にも人口的にも二日市がなんかも主導権を握ってたわけですよ。それはまあやむを得ないとしても、太宰府の方は名前に固執がある、太宰府という名前にですね。ところが、二日市はどうしても太宰府っていうのに難色、太宰府が主導権握るような形を嫌ったのでしよう。実質的には財政的にしても何にしても二日市が特に強かったからですね。それで最終的に名前の問題で、太宰府っていう名前を拒否されたんですよ。それで急に合併しきらんと行って降りたんですよ。でも孤立するのはまずいと。そのとき水城の方もね、太宰府が降りるなら水城も降りると。それなら、二つで合併しようということで急に話がまとまってですね、それで僅かな間に書類を作り上げて、三月一日の合併に漕ぎ着けたわけですね。だから総務分科会、財務分科会、それから厚生分科会とかですね、いろいろ分科会に分かれて、二年ぐらいかけてやって、大体まとまって、名前の問題になった時に決裂したんですよ。

○有馬 名前の問題なんですか。いや、なんで七か町村合併っていうことになったのかなあと思ってたんですけどね。

○有吉 名前なんですよ。せめて名前を「太宰府」というふうに名づけたいと思って、全員「太宰府」という名前が拒否されれば降りようと、もうとにかく苦しくてもやっていこうじゃないかっていうふうな気持ちだったですね。圧倒的に二日市が強かったですからねえ、ええ。

○有馬 それはしかし、当時の周辺の町村の感覚でいうと、名前が「太宰府」になるっていうのはやっぱり呑めない話だったんですか？

○有吉 二日市のある特定の人だったというふう聞いていますけどね。「筑紫野」となるのなら「太宰府」ってつけとった方がよかったです後から言う人がいたらしいし、現在でも太宰府でよいと言う人もおられますね。

○有馬 全国的な問題からいくと……。

○有吉 どうせ「筑紫野」ってつくなら、なんで「太宰府」を拒否したかって、我々はそう言いますけどね。ただ私もやっぱりあまりにも早く名前のことを出すぎたんじゃないかっていう気がせんでもなかったですねえ。もうとにかく「太宰府」の名前だけっていうようなことをですね、二日市を除いてずうっと根回しに総務委員が廻つとりますもんねえ。それが二日市にとっては快く思われなかったんじゃないかなっていうふうに思います。後知恵です。「筑紫野」より「太宰府」となって、七か町村がその時合併しておれば、また異なった発展をおったのではないのでしょうか。

○有馬 そうですねえ。

○有吉 その当時、絶対ダメだったというふうになったのはですね、実力のある二日市を外してですね、我々で根回ししましたでしょうが、それがどうも、最終的にですねカチンときたんじゃなからうかっていう気がせんでもないんですよ。一番最後に名前を持ち出し、二日市も

入れてやっつけばそうでもなかった。これはもう後の祭りですけどね。

○有馬 促進法の期限内でやるっていうことは、どういうメリットがあるんですか？

○有吉 そうですね。議員の任期が一年延びるとかですね、それから助成金がくるとか。うーん、それから何でしたかね。なんかその当時はいろいろメリットがあるように言われましたねえ。一番その身に染みたのは財政力がないっていうことですね。だからどうもこうもできなくなりましたもんです。合併して財政力をつけるといことが一番の目標でした。それで水城の方は赤字でしたのでね。合併してから、町長、助役、教育長で七〇万円、その頃の七〇万からですね、赤字を個人的に補填してもらいました。正式な赤字でなく、原因不明な赤字やったもんですから。財政的にどうしようもなくなっていたことが一番の要因でしょうね。中学校も負担が多いですね。

○有馬 しかし単純に考えますとね、最終的に太宰府・水城の合併っていうのは要するに赤字団体同士の合併だから、合併してどうなんですか、そんなに財政赤字が解消されるということなんですか？

○有吉 いやいや、当初はそうではなかったですねえ。

○有馬 でしょうね。

○有吉 ただもう、意地ですよ。

○有馬 なるほどね。そこで、こういう町村合併の促進の場合には県はかなり役割は果たすんですか？

○有吉 そうですね、今よりも強かったですね。

○有馬 ああ、そうですね。

○有吉 ええ、指導ですね。あの頃は地方事務所っていうのがありましてね。地方事務所の所長なんていうのはたいした権力を持っていま

したよ、ええ。

○有馬 地方事務所っていうのはだいたい昔の郡役所ぐらいの規模で……。

○有吉 そうですね、はい。

○有馬 じゃ、やっぱりいろんな面で、まあ指導というか、干渉というか、するわけですか？

○有吉 そうですよ、ええ。

○有馬 この町村合併の場合なんかだと、どういうことを言ってくるわけですか？

○有吉 うーん。とにかく「乗り遅れるぞ」とか、「三月三十一日までに決めんと後は面倒見らんぞ」とかですね、「よそも全部合併しよるのに、単独でやっていけるか」とかですね、数字的にあれを出してですね、だいたい財政当局は痛め付けられますよ。

○有馬 現在だと、例えばそういう問題が起こった場合に県の指導みたいなものは、あまりないんですか？

○有吉 そうですね。今はわりと自主的な感じで、そして、それぞれ市になりましたからねえ。まあ、村とかそういうところはやっぱり県に足繁く行ってんじゃないでしょうかねえ。

○有馬 やっぱり町の時代、時期っていいですか、その、ある程度財政的な支援っていうものはあるわけですか。県からの支援が。

○有吉 財政的に特別に町だから、村だからっていうことは、当時はないと思いますがねえ。ただあの、地方交付税がですねえ、特別交付税なんていうのはそういう政治的な要因があるようですから、それは別として、普通、地方交付税はほとんどそういう割り込む余地がなかったと思います。もう、ピシャッと計算されていますからね。

○有馬 最終的に水城と太宰府の合併っていう話になった時には、まあ先ほど言われた議員定数の問題もありますけど、水城と太宰府の間で調整しなきゃならないようなごちゃごちゃした問題っていうのは、特になかったんですか？

○有吉 そうですね。中学校は一緒だったし、特別にはなかったようでしたねえ。ただ赤字ですから、なんとか財政的にいろいろとはつきりせないかんっていうようなことが主じゃなかったですかね。とにかく七か町村合併一本できて急におじやんになったから、面子でもなんでもいいから合併せないかんっていうのがお互いにあったんじゃないでしょうかねえ。だから書類は後から作ったような形ですね、それで追々もう懸案事項を片付けていこうっていうことじゃなかったでしょうかねえ。

○有馬 先送りにして、合併だけ推進するということですか？

○有吉 ええ、「もうよそのものに遅れんようにしとかないかんぞ」と言ってる。

○有馬 ああ、やっぱり当時、もし七か町村合併がぶれて乗り遅れるっていうことになる、やっぱりかなり取り残された感じに……。

○有吉 そうですね。それはありましたね。

○有馬 議員定数の問題っていうのは地区割十人・十人で特に問題なしに……。

○有吉 それはなかったですねえ。

○有馬 合併の時は割と採めるものでしょ？

○有吉 そうなんです。役場の位置とかですね、それから議員定数とか、そういうので採めるもんですよ。ところが役場の位置はですね、ちようどこがコンパスで回って中心になるんですよねえ。それで、

ちようど太宰府町と水城村の境でしょ。町と村の境だからいいんじゃないか、また空いておりましたですしねえ。まあ割と電車からもそう遠くないし、県道に面しているし。太宰府の方では、商店街がさびれるという心配はたしかにありました。そういうのはあつたけど、それは克服されたと思いますねえ。

○有馬 用地買収のことは問題なかったんですか？

○有吉 畑でしたからですねえ。買収は割と簡単にできました。

○有馬 結局議員さんも従来から比べると太宰府町では減っちゃうわけですか？

○有吉 ええ。半分以下になってますからねえ。よくまあ決断したもんだと思いますね、二十二人が十人になったのですから。

○有馬 そうですよ、特に現職の議員さんなんか。

○有吉 実際にやってみてですね、集まる所がないじゃないかっていう議論が多かったですよねえ。議場に入らんとですよ、どこで議会するか。そこでこんどは三十数人も議員がいる、要るかかっていうわけですね。これには十三人と書いてあります。だいたい二十六人の予定だったんですよ。十三人ずつ、それでも多すぎるってことに実感としてそうなったんですよ。十三人ずつ、それでも、その当時としては議員定数を考えるとき、実感として入るところがない。いわゆる建物が大きいところならそういうこともないんですけど、入るところがない。実際に建てるまでに何年もかかるじゃないか。それで、「どうするとか」っていうようなことになってですね、そういう良識派が占めたということでしょうか。ただし、一期だけは小選挙区制でいこうと。それがせてもの妥協だったんですねえ。

○有馬 しかし、その後の選挙、小選挙区をなくした後も大体地区割

的に出るもんですか、議員さんていうのは。

○有吉 いや、だいぶ変わりましたねえ。

○有馬 変わりましたか？

○有吉 ええ。変わりました。これまでは社会党一名だけだったのが、その次からは共産党が出た。公明党もこの頃から出てこられたもんねえ。内藤さん⁽²⁰⁾と……、一人やっただですか。だから社会党、公明党、それから共産党というふうには、形がだんだんできてきましたね。部落推薦ばかりじゃいかんような形になってきましたね。

○有馬 やっぱり、そういう地区代表的な要素が変わってくるのは政党的な要素が入ってくるっていうのが大きいんですか？

○有吉 やはりなんと言っても、地区推薦の保守派がまあ一番多いんですけど。革新政党推薦は町全体から票を集めますから、特別に影響するようなことはなかったのですが、区が推薦して落とす場合ができませんでした、誰が責任をとるのかっていうような形がだんだんできてきましたね。やっぱり、そういうのはだんだん少なくなってきましたね。この表のとおり昔は落ちる人が多かったですよ。ところが、この頃はもう、一人か二人かですもんねえ。ベテラン議員が多くなったもんやけ新人が出づらくなったようです。

(休憩)

○有吉 個人的な資料がもし必要でしたらお持ちしましょうかねえ。私の個人的なものだから。

○有馬 小作地の台帳とか小作の証文とかそういうものもあります？

○有吉 ええ、持っております。

○有馬 ああ、そうですか。

○有吉 借用书がずっと残ってたんですけれども、借用书は個人的な

ものになるからですねえ、もう焼きました。

○有馬 はあはあ。

○有吉 収入印紙だけ、切って残してるんですけど。

○有馬 今、お宅の前の道路のところまでの駐車場も、お宅の土地ですか？

○有吉 はい、前あそこに自宅があったんですよ。大型車が夜通し通りましたね、寝られないんですよ。

○有馬 ああ、そうですか。

○有吉 あそこはですね、瓦が地響きとかで少しずづれてくるんですよ。

○有馬 はあはあ。

○有吉 戸樋が第一、役に立たなくなって瓦がずり落ちて戸樋の外にはみ出す。瓦は赤土でしか留めてませんので振動によって次第にずり落ちる。いくら修理してもどうしようもないから裏の方に引っ込んだんです。

○有馬 あの道路はいつ頃からああいう幹線道路みたいな感じになったんですか。あれ、昔からある道ですよ。

○有吉 ええ、昔からあります。昔から一回ほど拡幅されたようです。古賀町⁽³¹⁾まで行く道だったかどうかは知りませんが、只越⁽³²⁾を経由して宇美八幡宮⁽³³⁾、小林酒屋⁽³⁴⁾、あそこの酒屋の横から曲がってますね、須恵町の方に行く道でしたから。まあ、今のような道じゃなかったですね。

○有馬 いや、昔あの古賀に住んできたことがちょっとあったもんでからね。その時住んでいたところの前まで来てるんですね、あの道が。

○有吉 はい。

○有馬 向こうの人は二日市線って言ってましたけどねえ。

○有吉 そうですね。昔は二日市古賀線、二日市が筑紫野になって筑紫野古賀線って呼んでましたねえ。

○有馬 県道ですかね？

○有吉 勿論県道です。しかも県道の中でも一級の地方主要道です。

○有馬 ところで、古都大宰府を守る会は最初からずっと関係されてるんですか？

○有吉 ええ。私の助役の時にできましたので。

○有馬 ああ、そうですか。

○有吉 初代の事務局長は尾花さんっていう人で県の出納長をした人でした。亀井知事⁽³⁷⁾が特命で事務局長にして、理事長は九電社長瓦林潔⁽³⁸⁾さんでした。その当時からずうっと、経過をもう知つとんのは私しかおらんようになってしもうたですねえ。

○有馬 まあ、国立博物館誘致の目標があるから。

○有吉 ええ。西高辻宮司が土地を寄贈されるときから関わりましてね。

○有馬 あの土地はやっぱり県か何かから要請があつたんですか？

○有吉 いや、亀井さんが明治百年事業で国が博物館を創ると言った時に一番に手を挙げましたので、瓦林社長さんがそれに呼応して誘致期成会を作られました。それに協力する意味でいきなり寄贈されたんですよ。誘致がしやすいようにと。当時はもう、その土地を寄贈すればすぐできるというような安易な考え方もあつたかもしれませんですけど、あんまり早く寄贈しすぎたというふうな雰囲気もあつたようですよ。

○有馬 前の宮司さんは、そういう意味では非常に文化事業に熱心だったんですね。

○有吉 国博誘致は宮司にとっては百年来の念願でしたから。ところが私が小さい時にはですね、川を挟んで向こう側に住んであつたんですよ。私が歳は一つ上ですが、学校は早生まれですから二年上なんです。それでしょっちゅう遊びに行きよつたですねえ。お母さんから可愛がられて。次男坊の長男でしたが、三十七代宮司⁽³⁹⁾に子供がなかつたんですよ。それで、次男坊の長男に後を譲つたんでしょねえ。前宮司のお父さんは籠門神社⁽⁴⁰⁾の宮司さんで。

○有馬 前の宮司さんは十何年前ですかね。我々の方で天満宮で学会をやつたんですよ。古文書学会⁽⁴¹⁾っていうのがありましてね。

○有吉 ほう。

○有馬 それをやつた時も寄付して頂いたんじゃないかな。学会の方がびつくりしましてね。

○有吉 ふうん、そうですか。二十八才で宮司になり、町村合併の後、アメリカに留学しましてね。

○有馬 その辺のことももう少し教えて頂こうと思うんですけども。

○有吉 もう、何といても助役の今村君⁽⁴²⁾が生き字引ですよ。

○有馬 今村さんって方は当時、水城ですか？

○有吉 ええ、水城の教育委員会の職員になつていたようですねえ。だから、あの合併の時のことは詳しいんじゃないでしょうか。私も議員の方からですけど何もかも入つたばかりで、よく覚えてませんですけど、職員の立場からですね、いろいろ先輩から見たり聞いたりしていたと思いますよ。

(B面終了)

この後間もなく第二回目の日程を決めて散会した。

平成七(一九九五)年五月二十二日 有吉林之助氏聞取調査(第二回)

○有馬 この前うかがった中で、最初の選挙の時ですけども、この中で、新生会のメンバーはどなたか入ってますか？

○有吉 小野藤吉⁽⁴³⁾と私の二人です。

○有馬 お二人ですか。小野さんという方はどの辺りの方ですか？

○有吉 参道で醤油屋をやっていました。お父さんは町長をされた方です。その後、学校の先生ですね。現在は辞められて家におられる。

○有馬 ご健在ですか？

○有吉 ええ。

○有馬 そうですか。まあ、そういう若い人たちのグループで、地区割りなしで出ようと思ったら二人ぐらいがいいところですか、当選って。

○有吉 そうですね。

○有馬 その後ずっと続けて選挙に出られて、やっぱりしばらくはずっとそういう感じまで？

○有吉 いや、一期だけでしたよ。

○有馬 一期だけ？

○有吉 後はやはりもう各区の推薦っていう形になりましたね。

○有馬 ということは、最初の昭和二十二年の選挙の時だけでした？

○有吉 はい。

○有馬 なるほど。おそらくこういう場合には、町会議員選挙の場合には、いわゆる政党の色分けってあんまり付いてない人が多いんじゃないかと思うんですけども。

○有吉 そうですね、帰ってきたばかりで。親父たちはすっかり色が付いてましたね。

○有馬 その場合はどうなるわけですか、戦後でいうと。

○有吉 そうですね、昔の政友会とか民政党とかいって、なかなか政争が激しかったらしいですけど。しかし、私どもの時は帰ってきたばかりです。で私の場合、足掛け九年ぐらい満洲や東京の生活でしょう。また野戦の空気を吸ってきてる人、外地から引き揚げて来た人が多かったから、私どもの間ではそういう昔の選挙は知りもしませんし、色分けはなかったですね。ただ、農民政治連盟ですか、そういう新しい考え方の、いわゆる農家を中心とした人が多いもんですからね、そういう形の人が次の選挙あたりから出てきたようですね。ただ太宰府は、第一回の選挙で代議士に打って出るような人はいませんでした。県会にもなかったし。筑前というところは、昔から人材が育たなかった所のようなですね。

○有馬 この辺はだいたい戦前のご記憶でいうと、割と民政党系が強い所だったんですか？

○有吉 いや、政友会。

○有馬 政友系が強かったんですか？

○有吉 政友会と民政党と、どちらかといえば政友会系の方が強かったんじゃないでしょうか。民政党は商売人系統と、政友会の方が地主系統とだいたい大まかに分かれておったようですね。当時親父が勤めていたのは政友会系の筑紫銀行⁽⁴⁴⁾で、民政系は御笠銀行⁽⁴⁵⁾。先ほども申し上げました様に、太宰府の町是には、明治二十二年に出た印刷物ですが、今で言う『町政要覧』ですが、その中に七番目でしたか、六番目でしたか、庶民の金融機関を創れっていう項目が一つあるんですが。というのは、政友系、民政系の銀行はあるが庶民の金融機関がないんだと。産業組合法が制定された直後ということもあり、太宰府では北

谷に信用組合が一番にできております。

○有馬 有吉さんのお父さんは政友会支持だったんですか？

○有吉 そうですね。筑紫銀行だったもんですから。

○有馬 戦後最初の選挙ってというのは、有吉さんたちのグループだけでなしに、ほかの候補者の人も割と若い人が出てきたんですか？

○有吉 そうでもなかったです。やっぱり、町、区の長老かその推薦を受けた中老の人でした。若いのは私と小野藤吉さんですね。そのほかには、あんまりおらんかったですね。女性では中川さん⁽⁴⁶⁾という歯科医の奥さんがおりました。当時の婦人会と競合し、勝ったわけです。

○有馬 女性は中川さん一人ですか？

○有吉 そうですね。それからほとんど女性は出てませんもんね。

○有馬 有吉さんご自身は戦後町会議員に選出された後、県議会議員の選挙とか衆議院議員の選挙で、どなたかを支持して運動をやったというご経験は？

○有吉 最初は中村寅太⁽⁴⁷⁾ですね。吠代議士⁽⁴⁸⁾といわれ、米一俵いくらという従来の計算方法を改め、別に包装代を支払うようにした有名な弁護士でした。それで県会議員は奥村⁽⁴⁹⁾。農協におった関係で、ずっと二人を推してきました。

○有馬 やっぱりそういう選挙の時は、農協組織の人々が運動員にされるっていいですか、そういう感じの選挙になるんですか？

○有吉 そうですね。経済団体が直接っていうわけにいきませんし、太宰府は先ほど申し上げた準組合員が多かったもんですから。昔から信用事業が主体ですから。だから組織を挙げて政治運動をするっていうのがなかなか難しかったので、農民政治連盟⁽⁵⁰⁾っていうのが特別にできましてですね、その組織を通じて農協と全然別個の組織という形で

運動はやってましたから。事務的には援助はやってましたけど、表面的には全然役員構成も違うし。

○有馬 有吉さん自身は、農民政治連盟の役員になったことはないんですか？

○有吉 世話はしましたが、直接役員にはなりませんでした。農協の参事をしてましたから。

○有馬 農協の役職に付いてる人は、だいたい農民政治連盟の役員に直接なるってことはないわけですか？

○有吉 太宰府はですね、農協の下部の組織に農事組合組織⁽⁵¹⁾というのがあって、その農事組合組織には農民政治連盟の役員を兼ねた人が非常に多かったけど、政治連盟のトップは農協の役員とは兼ねることはありませんでした。

○有馬 やっぱり選挙の時、末端では実行組合の人が、いわば一番下で票をまとめるみたいな役割をする人で？

○有吉 そうですね。農事組合、昔は実行組合⁽⁵²⁾と言っておりましたが、一つの大きな組織でしたから、その点は強かったですね。最初は福岡県とどこかの県が農民主党を作った。全国的には、なかなか農業だけを主体にした政党というのは難しいんですね。そりゃもう外交の問題とか、教育の問題とかあるし、そういう国の基本的な政策になりますと、どうしても農民主党というのは自分のテリトリーを守るというのが強いもんですから、選挙に訴える力は弱かったですね。そういう意味では、福岡県は特別に強かったようですが、全国的な組織はなかなかできなかったですね。それで自民党と一緒になったような形で。

○有馬 いわゆる五五年体制⁽⁵³⁾っていいですかね、前の段階では農民政治連盟は、政党との関連で言うとうとうという事になってたんですか？

○有吉 当初はやはり教育問題とか国防、外交の問題とかいうことよりも、自分たちの生活のことで吠代を勝ちとるとか、中味取引をするとか、米価を上げる闘争とか、そういうことを主体にしてやってた。だから限界にきたんですよね。太宰府ではこの人がトップでですね、一人、二人、三人、四人、五人、私で六人でしょう。それから、七人、八人、九人、この人は、農民政治連盟の委員長でして。

○有馬 安部勝市さん？

○有吉 そうですね。安部陽ですか、今度市会議員になった。その人のお父さんです。

○有馬 なるほど。

○有吉 安部が委員長でしょ。それから木村甚吾⁽⁵⁰⁾、それから北谷の齋藤蔵吉⁽⁵¹⁾。

○有馬 有吉さんですね。

○有吉 それから大庭佐吉⁽⁵²⁾、それから座親岩次郎⁽⁵³⁾。

○有馬 ああ、座親さん。

○有吉 うん、座親岩次郎、古城戸茂三郎⁽⁵⁴⁾、それから有吉重三⁽⁵⁵⁾、田村清男⁽⁵⁶⁾、それくらいですね。

○有馬 かなりの数ですね。そういう農民政治連盟みたいな形で運動っていうか、選挙の時の支持基盤があんまりそういった格好でうまくいなくなってくるのはいつ頃からですか？

○有吉 合併までくらいは大丈夫だったですね。合併してから水城の方がどうしても農業としては太宰府よりも強かったんですね。だから仮に十人の農業関係の方がおられますと一人、二人でしょ。

○有馬 三十年くらいの選挙ですね。

○有吉 一、二、三、これですね。

○有馬 古賀さん⁽⁵⁷⁾。

○有吉 その三人しかおりません。後は関係のない人ですね。だから数からいってもこの辺から変わってきているんですね、これ一人。

○有馬 三十四年ですね。木村。

○有吉 それから、二人。

○有馬 中島さん⁽⁵⁸⁾。

○有吉 これも組合長ですね。三、四、五。

○有馬 有吉さん。これは、陶山さん⁽⁵⁹⁾。

○有吉 陶山義武、木村金三郎⁽⁶⁰⁾、西山源一⁽⁶¹⁾、帆足卯造⁽⁶²⁾、吉塚勘造⁽⁶³⁾、萩尾与斯美⁽⁶⁴⁾。これが、今の県会議員のお父さん。

○有馬 ああ、吉塚さんが。

○有吉 これが佐藤市長のお父さんですね。

○有馬 佐藤さん。今数えた中では、帆足さんは水城になっちゃうわけですか？

○有吉 水城の方が多いでしょ。

○有馬 はい。

○有吉 一人。

○有馬 陶山さん。

○有吉 それから二人ですね。

○有馬 武藤さん⁽⁶⁵⁾。

○有吉 三人。

○有馬 西山さん。

○有吉 四人、五人。

○有馬 帆足さん。

○有吉 六人。

- 有馬 吉塚さん。
- 有吉 七人ですね。
- 有馬 ああ、萩尾さん。
- 有吉 一人、二人、太宰府は、三人ですね。
- 有馬 太宰府が三人。
- 有吉 だんだん減ってきますよ。
- 有馬 やっぱり、昭和三十年くらい。
- 有吉 三十年に合併しましてね、その後急速に人口が増え出したからですね。この付近から従来、太宰府におられなかった様な新しい住民の方がどんどん来られてますからね。三十四年の時は社会党の中村恒義⁽⁶⁷⁾一人です。新しく新住民としては。
- 有馬 新住民で町会議員になったのは中村恒義さん。
- 有吉 それからですね。
- 有馬 三十八年だと、もっと増えるわけですね？
- 有吉 増えると思いますがね。いや増えとらんですな。
- 有馬 三十八年ではそんなに増えてない。もっと後なんですね？
- 有吉 これは増えましたね。一人。
- 有馬 四十二年。藤野⁽⁶⁸⁾さん。
- 有吉 二人、三人。
- 有馬 藤野さんとあとどなたですか？
- 有吉 藤野昭一。それから小山⁽⁶⁹⁾さんと内藤さんですね。
- 有馬 内藤さん。
- 有吉 三人ですかね。
- 有馬 そのくらいですか。
- 有吉 三人ですね。

- 有吉 ここでは、内藤さん。
- 有馬 四十六年では内藤さん、五反田⁽⁷⁰⁾さん。
- 有吉 三人ですかね。
- 有馬 だいたいの辺の地区ですか？
- 有吉 榎寺⁽⁷¹⁾ですかね。新しい団地が早くできましたしね。
- 有馬 あっそうか。新しく団地ができたところっていうのは、必然的にそうなるわけですね。
- 有吉 そうです。
- 有馬 森山君の方からこの前うかがったことで質問はありますか？
- 森山 そうですね。財源の問題なんですが、大正期の資料を見ると、学校を作った時が一番予算がオーバーになってるんですね、講堂を作るとかいうことで。太宰府も水城もそんな感じなんですか、だいたい教育関係が大きくて。
- 有吉 そうですね。
- 森山 ウェイトが大きかったというか……。
- 有吉 単独事業で起債を八〇％も認めてくれるっていうことは昔はなかったですからね。だから財源をしっかりと持っていなとなかなか建てられなかったんですよ、いろんな施設が。それだけの余裕がなかったですからね、ほとんど。だからそういうように講堂を建てるとか建て替えるとかいう時には、大きなお金が要ると、借金を一気にしないといかんでしょ。だからそれを戻していくためには何年間か何もされんというところで、新しい施設はなかったですね。ほとんどできてないですよ、議員になってからですね。公民館がないので天満宮の心池館を借りて公民館代わりにし、私が一時公民館長を兼ねた時もありました。特に太宰府は文書館がありましたしね。天満宮の文書館をほ

とんど使わしてもらっていましたから。大きな会合の時は、学校の講堂を使う時もありました。合併してやっとなすね、三年目に庁舎を建てにゃいかんということですね。議員が入るとこもないような、座つてやるようなところですから建てないといかんということで、この市役所ができる以前に、二階建ての木造の役場を作ったんですよ。その前に新制中学を作らなくちゃいけないということで、中学を作るのに金がないと。それでさつきお話ししましたように、水城小学校で青空教室かなんかやってたんですけど、横の宮村女子商業高等学校が校地と校舎を全部無償で寄付されたんですよ。それでその前から、組合立の学業院中学校を作ってやってたんですけれども、寄贈されたもんですから、それをもらいうけて、そのままいぶん長いこと使ってたね。

○有馬 それまでは、学業院中学は校舎といつか建物は？

○有吉 閑屋(2)のすね、水城小学校つていいましたかね、昔は。そして空いている教室を借りてすね、それから青空教室すね、校庭に机を並べて、椅子並べて。校庭で一回生、二回生は勉強したことを覚えていまして。横でそういうことをやってたですから、宮村さんも見ろに見かねて。しかもストが大変長期に続いたんですよ。そういうことで、学生が中に入らなかつたりしたもんですから思い切つて寄附されたものと考えます。水城もすね、今の国道三号線の所の、西鉄(2)を渡った向こう側に広場ができてすけど、昔は広場じゃなくつて田圃(2)ばかりで。その国道の方から、今パチンコ屋かなんかできてる、そこから、左に折れてつたとこに村営の授産場(2)つて言うのがあつたんですよ。その授産場を經營するのが難しいからとつて、売つてしましましてね。金がないから、売るものがあれば売つてしまおうという

様な形で。

○有馬 前の庁舎を作るときはそのくらいのお金は借金しないで……。

○有吉 いや、借金しました。

○有馬 借金したんですか？

○有吉 ええ、しましたね。国の方で、起債制度つていうのがだんだんと整つてきましたね。大部分は貸してくれるという形になってきました。そして、中村町長(2)の時に水道事業に着手したんですよ。当時は、「金のない時に水道事業なんて」と、「水を買つて飲む人がおるじやろうか」と言つた意見が多く、中村町長もだいたい苦労したようですよ。それで人口が伸び始めたんですよ、水道ができてから。

○有馬 その時が初めてですか、水道は。

○有吉 そうなんです。

○有馬 始めた当時の水道は、水源はどこなんですか？

○有吉 松川ダム(2)ですよ。そこから毎日三千トン取水することができると。御笠川の本流をせき止めて。それまではほとんど井戸でしよ。だから「誰が水を買つてまで飲むのか」と言つた反対があつて、私はその時は議員を辞めましたけど。苦労されたようすね。

○有馬 しかし結果的にはそれが……。

○有吉 それが、人口が増えるきつかけのような感じだったすね。ちやうど高度成長期に入る前だったもんですから。それから少しずつすね、やっぱり合併しつて良かつたなという感じになつていきました。

(2本目A面終了)

○有馬 そういうふうになつて新しく団地ができて、人口が増えてくるとい

うために水道整備っていうのは、非常に大きな必要性があるんですね。
○有吉 そうですね。だから、まあ反対を押し切ってよくなされたと感じてますね。金も財源もない時にですね、よく思い切ってなされたと思ってます。

○有馬 それも起債で賄ったんですか？

○有吉 ええ、起債です。水道事業は独立会計でやらなくちゃいけない部分ですからね。

○有馬 水道は補助金なんかは出ないんですか？

○有吉 出ます。ダム築造とか給水本管を敷設するとか、そういう施設には。末端施設には出ませんでした。

○有馬 それは国の補助金ですか？

○有吉 ええ、国の補助金です。合併してから、水道ができてからですね、急速に住宅地ができて人口が増えて、西鉄がまず太宰府に宅地造成を始めましてね。一番はじめが湯ノ谷⁽⁷⁷⁾です。太宰府町自体も町営住宅を何軒か建てましたねえ。

○有馬 それは何年ごろですか？

○有吉 それは、中村町長の時と川辺町長の時⁽⁷⁸⁾ですから、四十六年の時ですね。何軒もはできなかったけど、町営住宅は五軒くらいじゃなかったですかね、それも規模の少ない。土砂が崩れましてね。ブルドーザーとかその頃はなかったでしょ。人力でやってたのに土砂が崩れて。確か死亡者も出たと思いますよ、一人。

○有馬 その頃、やっぱり町営住宅なんていうものは、要求は強かったんですか？

○有吉 どうでしたかねえ。よそでは二日市町も⁽⁷⁹⁾始めたし、大野城町もやってるぞ、ということでしょうか。こういう方法があるぞっていうことじゃ

なかったですかねえ。それでとにかくお付き合いで。

○有馬 やっぱそういう政策っていうのは、あっちもこっちもやってるっていうと何か……。

○有吉 そうですね。自分のところで独創的にやったんじゃないんですね、隣がやってるから俺んともやるっていう気になって、そういうのは伝播しますからね。

○有馬 なるほどね。その場合も、お金借りなきゃいけないでしょう？

○有吉 そうですね、お金借りてやったんですね。そして町営住宅といましても後で売却したですね。それから森田町長の時には、町役場を建てるのと一緒に、観世音寺の収蔵庫⁽⁸⁰⁾を補助金受けてやりましてね。森田町長が国に向いて補助金をもらってですね。

○有馬 現在のあの収蔵庫ですか？

○有吉 ええ。これで、合併して文化財の保存整備がやっとできるようになったわけです。まあ、主体は観世音寺っていうことになってますけど。しかし国から補助金が出たので、借金しなくても良かったよいうです。

○有馬 募金もかなりあったんですか？

○有吉 ええ。

○有馬 それは集まりましたか？

○有吉 ええ、集まったですよ。瓦募金もあったし。その頃からですね、観世音寺の瓦募金。

○有馬 先ほどの水道事業をやって、人口が増加してくるっていうお話ですけども、どういう時に町としてある程度先を見通した政策的な活動っていいですか……。

○有吉 中村町長がこのままじゃ、太宰府は発展の見込みがないからって。第一にこの時に学校を誘致しています。今建ってる大学もみんな中村町長の時に誘致し、用地買収を済ませた大学ですよ。それに観光と住宅の三つの柱をこの時中村町長が立てました。天満宮の参拝客もだんだん増えてきており、それから学校では、筑紫女学園短大、福岡女子短大、それに麻生学園、国士館ですね。それと第一経済大学と第一保育短大、すべて中村町長の時に誘致した大学ですよ。

○有馬 学校を誘致しようっていうのは、中村町長の発想ですか？

○有吉 はい、そうでした。一つは、前の西高辻宮司が学校の誘致には積極的に協力してありましたね。ご自分の土地を提供したりですね。そういうことをする為には、水道の事業をやらなくちゃいけないというのが理屈だったんですね。それでも学校来るのはいいと、天満宮の参拝客増えるのはいいと、住宅がそうたやすく太宰府にできるかと、水は買えないという心配っていうのはあったんですね。

○有馬 住宅が来るといふ問題は、やっぱり西鉄っていうお話がさつき出ましたけど、民間の資本が入ってくる形で開発されるわけですね。それはどっちの要素が強いんでしょうかね。やっぱり町がある程度積極的に。

○有吉 住宅についてはですね、特別な優遇措置なんてのはありませんでしたけど。農業係が農地の転用だとか、宅地造成とか建設とかに、町長が誘致しているのだからといって、協力的であったことは事実です。学校についてはですね、町長が自ら部下に督促して、買収交渉させておりました。山の手はだから安く買ってますよ、みんな。その当時は住宅も来てないですね、団地としてもまだだし、先にもう太宰府の一番いいところは全部買い占められたような形で。国士館なんて

坪二八〇円くらいですね。麻生学園が、坪の八〇〇円くらいでしたね。こっちは、やっぱりそのくらいですよ。一〇〇〇円はしてないですね。一〇〇〇円以下ですよ。

○有馬 ということは、町長が間に入って買収交渉までやって、誘致して来ると。

○有吉 そうですよ。確かに、役場の職員が直接交渉しましてですね。前の収入役をしておりました中山君⁽⁸⁾、今は、管理公社の理事長をしてるでしょ、あの中山君が入ったばかりの時に、中村町長の命を受けて熱心に協力しておりました。

○有馬 実際、買収に応じる方は、割と協力的だったんですか？

○有吉 そうですね、その頃までは絶対駄目だと言う人は、今は必ずおられますけど、その頃は案外おらんかったですね。とにかく、ちよつと金になるといふ見通しがないようなところが坪何百円で買うもんですからね。金がポツカリと入ってくるわけですからね。ただ国士館の時にですね、山だけじゃなしに谷あいに農地があるのを買収せにやいかんことになり、農地になると、やっぱりそこしか持っていない農家の方がだいぶん難色を示された方がいたんですね。そこでみんなで少しずつ金を三〇〇円のところ、二〇円ずつみんなで出し合って、その農家の土地が全部なくなる方にプラスしてあげようじゃないかというようなことで。みんなですね。そこまで協力しないと全体の買収は難しいですからね。そういうこともあったですね。だから、三〇〇円が二八〇円に確かなったはずで。今はちよつと考えられんですね。今は何するにも絶対反対という人が何人かおりますからねえ。

○有馬 そうすると、そういう用地ストックに対する協力とか、そういうのがあって。来てくれる学校に対してはある種の優遇措置とい

ますか、そういうことになるんですかね。それ以外に、特別になにか優遇措置をとったとかそういうことは特にはなかったんですか？

○有吉 それは特別にはなかったようですね。学校法人については、あんまりなかったですね。ただ町の立場、市の立場から言いますと、固定資産税など税金が入りませんので。太宰府は神社とお寺と学校が多く、税収が少なくなると言ったマイナスの面はありましたが。

○有馬 何にも入ってこない。実際どうですか、宅地の場合は。町の方が積極的に働きかけて呼んでくるとかですね、それは特にないですか？

○有吉 それはなかったですけど、部落で共有地を持った方なんかが進んで開発公社と連絡をとったことはありました。私有地がたくさんありまして、それを部落でまとめてというようなことはあったようですね。

○有馬 ああ、なるほどね。

○有吉 あの当時はですね、私の所に来てくださって誘致するのを勧めるような雰囲気でしたね。それがある程度経ちますとね、だんだん、うるさいとかですね。ダンプが通つてうるさいとか、やかましいとか、道を広げるとかですね。いや、道をそんなに広げてもらっちゃ困るとかですね、だんだんそういうのが出てきましてね。当初はもう売りたい一心の人が多かったですね。それで一段落しますと、今度は反対の反応がね、もうよかとか、いらんとかですね。

○有馬 そういうふうには、宅地開発が進んでいく様な段階ですね、町の当局の方にはどういう都市計画的な考え方についていますか。

○有吉 当初はありませんでしたね、一番最初は乱開発でしたから。それじゃいかんということで、宅地造成法ができて、それも最初は届

け出だけだったんですね。それもいかんということで、規制される様にだんだんなったんですね。だから、一番当初は勝手に造成してるもんですから、それが重荷になりましてね。開発された土地に住民が住むようになると苦情は町に持ち込まれる。最終的に業者は逃げて、町に責任はないと言っておれなくなる。土砂崩れとか、側溝が崩れたりしますとね、どうしても市が何とかしないと、側溝が崩れて市道に認定するにしても、側溝がもう破れてしまっているわけですね。往生しましてね。たくさんそういう不良団地があつて未だに困っているんですよ。有名な所がいくつかあります。私は破れ団地って言つてたんですけども、そういう規制をする規則がなかったもんですからね。住民は売りたい。片一方は、簡単に造成してばつと売りたいと。それで、売ってしまったら逃げてしまうもんですからね。それで倒産したところもありますしね。そういうことで、最終的には市が全部責任を持たなきゃならなくなつて。誰が開発をしたんだとか、誰がこういうのを誘致したのかとかいう話が盛んにされるようになりました。その頃はですね、町がするじゃなしに、業者が土地を買つて簡単に造成して、雨が降ったら流れる様な団地がありましたよ。往生しましたですね。法律の方もやかましくなってきましたし、都市計画法によって市街化区域と市街化調整区域の線引きができました、それで造成するにしても、用途地域によって、規制がされてくるようになってきたんですね。当初は全然あつてなきが如くですね。ある程度の面積以上は届けなさいと。それ以下の所は勝手だったです。

○有馬 ちょっと違う話になりますけどよろしいでしょうか。農地改革の時の話をちよつとかがいたと思うのですけれども。この辺りは、それほど大規模の地主さんとかはおられなかったんですよね？

○有吉 大きな地主はおらんかったです。

○有馬 実際の経過って言いますかね、割とこうスムーズに行った感じなんです。

○有吉 そうですね。戦争は負けましたし、あの時はマツカーサーに取られるっていうことで、みんなもうあきらめ気味でした。私は、マツカーサーしか農地改革ができなかったと思います。日本の発展のためにかえって底力ができたんじゃないかと思っただけです。そういう意味では農地改革は非常に成功したのではないかと思います。大きな抵抗もなかったし。ただ、山林だけは解放にならなかったですね。ここは大きな山林の地主もおりませんでした。

○有馬 この辺は農地委員はどなただったんですか？

○有吉 農地委員は、当時は農地調整委員って言ってましたね、一番最初は。それは、小作代表が何人、地主代表が何人、中立が何人、ということ。農地調整委員に地主から誰を押しようか、という話し合いはあったようですね。三人くらいじゃなかったでしょうか。三人か四人かでした。中立が二人くらいです。

○有馬 小作の代表の人は、何か戦前に小作組合の運営をやったとか？

○有吉 やってました。農民組合の安部勝市とか、木村弥市（註）くらいしか覚えてませんけど。

○有馬 有吉さんのお宅なんかも結局……。

○有吉 ええ。私はあんまり記憶にないんですけど、親父が八反残すのにどこを残したらいいのか探しに行きましたね。まあ一番いいところを、悪いところは外して。ところが、農地法でいいと、いいところは優良農地でなかなか農地の宅地転用は難しく、悪い農地の方は

水かかりが悪い所ですよ。昔の農地の良い悪いは、良くできるとか良くできないよりも、水掛りが一番いいところが一番良い農地だった。そんなわけで水掛りの悪いところを外してしまつて、良いところを残そうとしたんですよ。反対に、小作の人はそういう優良農地はわずかでした。それで、地主には買取代金は国債で支払われました。十年払いか、それも一反いくらかの僅かなもの。もう覚えてませんけど。結果的には農地主がはずした農地がほとんど住宅、宅地に転換していったのですよ。そういう水掛りのいい農地は優良農地で転業もなかなか困難で。それよりもそういう水掛りの悪いところが、ほとんど売れていって、農地をもらった小作の方がほとんどそういう土地が売れたもんですからね。逆転してしまつた様な状況でしたね。

○有馬 そういう事というのは、やっぱりある種、地域の住民の方の意識っていいですか、変わってくるっていうのは。

○有吉 もう、私たちの代になると、そういう地主对小作という関係はもうほとんどなかったですね。

○有馬 戦前の感じで言えば、地域の有力者の人っていうのはだいたいの地主さんで、その人が取りまとめ役みたいな事をやって、その中からまた議員さんが出るっていうような感じだったんでしょ。そういうような関係っていうのは、割と早くなくなるもんですかね。

○有吉 私たちのころはもう、親父の代までは強かつたんですけど、それはなかったですね。あそここの家の土地だったぞとかですね、あそこもそうだったぞという話は聞きますけど。直接小作代を受け取つたりとかしてないもんですからね。だからそういう関係は急速に薄れたようですね。しかも、戦争で農村から全部外に出してしまった若い人が帰ってきて、いろんなことの知識をつけて、見聞を広げて帰ってきて

て、そういう一つの大きな意識の近代化には、力になっていったんでしょかね。第一、世代が変わってるでしょう、どんどん。だから、お祖父ちゃんの時とか、お父さんの時の事なんかですね、我々と同じ様に小さい時には聞いてたかもしれないけどですね、もう全然そういう直接の関係がないもんですから、ほとんど忘れるとか、また知らないことが多いんじゃないでしょうかね。

○有馬 農地改革っていうのは、その戦後の日本の社会のあり方を根本的に変えた、非常に大きな改革だと思っんですけどもね。実際にその当時の感じていうと、いかがでしたですか。これで、大きく世の中変わってくるっていう感じは。

○有吉 感じよりも、土地がそんなに高くなかったでしょ、その当時はですね。国税を何円以上納めてる人でないと選挙権がなかったという時代がちょっと続きましたので。親戚にですね、土地持っていないところに、二十坪、三十坪名前を分けてですね、選挙権を持てていうようなふうで。どんどん束になって勢力を増やすような、土地を無償で買えるようなふうで。土地そのものは小作米の米としての収入があるけれども、土地そのものを売って金っていうふうな観念がなかったですね。だから、極端に安く買い上げられたっていう観念はありましたけれども。現在のようになら、何十万もするようになってきますと、それは悔しかったでしょうね。あの当時は土地の値段がただ同然の様な形でしたからねえ。だから、そうまでなかったんじゃないかな。直接その当時の関わった人は、大変苦しかったんじゃないか。マッカーサーに対する反抗もあったんじゃないかと思うんですけども。いかんせん負けてますもんでね。たぶんしょうがないというふうな気持ちもあったと思いますねえ。

○有馬 農地改革当時の感覚でいうと、その後、日本郡部の農村がこんなに大きく変わったっていうのは予測できなかったでしょうねえ。

○有吉 予測していなかったでしょうねえ。それは後から、農家にすばらしい力が付いたっていうのは、全部その農地改革のお蔭であったということ。

○有馬 どうなんですか。有吉さんなんか実感として、日本の農村というところと最初に貧しいっていう言葉がくるような感じで、そういう状況から見ると、農村はかなり豊かになったんじゃないかっていう感じを実際にお持ちになったのはいつ頃ですか？

○有吉 そうですね、終戦、終戦の物が無い、特に米がない時ですね、農家は尺祝いっていうのがあって、百円札で一尺、「尺買いい」っていうのが新聞によく出てますねえ。ほとんどその闇米で、都会からどんな買い出しに来てたのが目に付いてますもんねえ。戦前でしたら小作米を出すと半分か六分しか残らなかったものだから。

○有馬 どうなんですか、農協の役割としては、いろんな役割があるでしょうけど、戦後で言いますとどっかでやっつてくることの重点が変わって行くって言いますか、何かそういうふうなポイントっていうのはあるんですか？

○有吉 そうですねえ。さっきも言いました様に、戦前の小作争議とか、小作問題とかいうのには私は実際の経験がないもんですから、その件に関しては、農地解放後の農家しか私は直接知らない。まあ、噂では聞いてましたけどねえ。しかし実際に農村の世話をしたり、実行組合長をやったりなんかする人は、やっぱり地主の子弟とか、地主その人だとか、年取ってもやっぱり実際の村の、部落の世話人でしたから、直接激しい小作争議等で先頭に立っているような人は、少数

でしたからねえ。総会やなんかでもやかましくいう人は何人かで、そう大きく農協運動に反対するとかなんていうことはなかったようですよ。ただもう、当時の組合長に個人的に反対という様な話は聞いてましたが、それは大勢じゃなかったでしょうかねえ。役員も、みんななかなか出さなかったですよ、そういう人は。

○有馬 しかし、大勢ではないけれども、おられたことはおられたんですね？

○有吉 はい、おりました。

※テープ終了のため一時不明

○有吉 当時の指導者に全然反対するものがなかったとは言えませんが、しかし、部落に行きますとどうしてもそういう人たちにですね、中心的な、取りまとめていくような人は、どうしてもそういう人たちになっちゃいますよ。ねえ。

○有馬 そういう、いわば戦前からの指導的な人で、そういう運営に反対だつていうようなことを言ってる人たちつてのは、戦後で言うことやっぱり政党の関係はあるわけですか。

○有吉 そうですねえ。農民組合的な社会党的な方でしたから、農政連には加入しなくてですね。しかし太宰府ではもう本当に少数でしたね。もう何人かでした。

○有馬 この辺りだと、太宰府周辺を含めて、そういう勢力は強くなかったんですか？

○有吉 そうですね。あんまり強くなかったですね。一つには、大きな地主がおらなかつたからでしょうけどねえ。まあ、バラバラな小さな地主ばかりだもんですからねえ。大きな地主で、小作人がたくさん

おるような。

○有馬 やっぱり戦後初期のある時期までは、供出つていうのは、やっぱり非常に大きな問題？

○有吉 ええ。

○有馬 まあ、いわば調整つていいですか。

○有吉 そういう人たちに頼らざるをえないんですよ。太宰府町としては、農協としてもですね、まとめて調整できるような人が代表になつてくれた方がやり易いもんですからねえ。やっぱりそういう方をお願いすることになるのです。だから、町会議員でも農民組合からは出ていません。ほとんどなつてないです。まあ、強いて挙げれば安倍勝市さん。それでも議員としては大人しかったですよ。ええ。

○有馬 農協としてはどうなんですか、そういうことと同時に、やっぱり作付けの指導とかですね、いわゆる営農の……。

○有吉 営農指導ですね。今の太宰府は、それにしても、反別が少ない、農家が少ないということがあつて重点は重点でしたけど、農協の重点項目でしたけれどもですね、職員の数から言いますと、やっぱり少なかったですね。よその農協に比べまして。

○有馬 そういう、まあ作付け、品種の問題とか、肥料とか、機械の導入とかですね、そういうふうなことで言うと、戦後の農協の、この辺りでは指導の重点というの、こういうことをやってたんですか？

○有吉 そうですねえ。実際に農協自体で特別な技術屋を大量に採用することはなかなか難しいですから、県の方では国の補助事業として、農業改良普及所と言うのがありまして、普及員がたくさんいて、今はもう少なくなつてますけど、町村毎に担当者がおつてね、農協の技術員と一緒に農家を指導していくと。そういうことで、技術指導

はどうしても、普及所頼りということが主体でしたね。だから農協としては、技術指導よりも肥料を計画的に購入してもらったり、水稻の栽培の技術的な指導と同時に、窒素肥料はどうだとか、リン酸肥料はどうだとかいう指導をするもんですから。それを予約でまとめて購買増につなげるとか、新たな農業機械を紹介して購買増につなげるとか、購買と非常に関連した指導を農協はしてきたと言えますね、やっぱり。人件費を少なくするために。純粹な技術的な指導を普及所に頼ると。今でもそうだと思うんですけどねえ。今はもう、普及所にはだいぶ人員が少なくなってきましたけど。

○有馬 次ですね、有吉さん御自身の御経歴の方なんですけれども、昭和四十六年から助役をされたんですかね？

○有吉 はい。

○有馬 その前に少し間があつたようですけど、議員はそれよりだいぶ前に辞めておられたのですか？

○有吉 はい。二期前に辞めています。

○有馬 そうすると、その間、直接、町の行政には関わっておられないんですか？

○有吉 委員はなんかしたようですねえ。監査委員もしたと思うんですけど。

○有馬 ええ。監査委員をされています。

○有吉 農協に専念しようと思いましたがね。若いときからずっと、議会生活をさせてもらったもんですから、農協に恩返しせんといかんと思つてですね。そして代わりに専務が議員になったんですよ。今までとは全く反対に専務が町会議員になられて、私は農協の仕事を専念したと。○有馬 議員を辞められて農協に専念されたときはどういう役職で？

○有吉 参事です。最初から参事。

○有馬 ずっと参事。それで助役になられたのはどういう経緯だったんですか？

○有吉 それはですね、川辺という新しい町長が激戦の末に就任されたんですね。それで川辺町長から私に助役をという白羽の矢が立ったらしいです。私は農協の組合長だったもんですから。三年任期の二年目でしたから、そんなことはできんと言つて断つたんですよ。一か月くらい断り続けましたけどね。農協の職員にも、農協を見限つて出て行くのかと詰められる場もありました。私も一か月以上ずっと断り続けたものです。それで六月の議会にどうしても助役選任の議案を出さなきゃいかんからと今度は議員が勧めに来ましてねえ、議長以下ね。それでとうとう口説き落とされて、組合長を常勤から非常勤に。一年間だけですね。四十七年の四月くらいでしたか、任期が。だから非常勤に。で、役員会とか何かのときに出て行くだけで。農協が了承してくれてですね。農協の理事にも、職員にもだいぶ働きかけがあつたよ。最後には町長が私の名前を打ち出したらしいもんで、引つ込みつかん様になつてしまつてですね。

○有馬 現職のまま助役ですか？

○有吉 ええ、農協組合長のままですねえ。そして、非常勤の組合長という形で。

○有馬 川辺町長は、最初に町長になった選挙の時は、現職と争つているんですね。

○有吉 そうそう、そうなんです。助役と町長とが候補だったんですね。私は全く中立でどちらにもつけませんのでねえ。

○有馬 だいたい町長選挙つてのは、戦後は割と競争激しかったんで

すか？

○有吉 うん、最初からずっと選挙でしたよ。

○有馬 そうですね。

○有吉 森田さんの時が無投票。

○有馬 この時もそうですね。

○有吉 川辺町長の二期目から無投票が続いております。新聞記者が、「なんで無投票がずっと続くのですか」って聞くんです。私が二期で、伊藤市長の時ほとんど選挙っていう選挙じゃなかったですけどね。まあ選挙はちよつとありましたけど、もうほとんど無投票でしょう。今度は、佐藤さんですか？

○有馬 そうですね。あの辺からずっと無投票なんです。どういうことなんですかね。かなり激しい競争選挙があつて、その後ずっと無投票が。

○有吉 そうなんです。川辺さんと中村さんの選挙が激しかったですね。今になって考えれば、あの選挙のおかげで、筑紫野・古賀線バイパスができなかつたんですよ。反対ですね、中村さんが勝つとれば、立派なバイパスが早ようできとつたんですよ。反対の先鋒が川辺町長なんです。中村さんの時の計画は四王寺山麓を通つて筑紫工業高校(82)のこの横を通つて、農協中央支店の横を通つて、今の第一経済大学のところの四つ角三号線に出る案でした。説明会を始めて、測量しようという段階になって反対が出てきたんですよ。川辺町長はその反対の先鋒となり、町長選に勝つと議会で計画案を否決してしまいました。私はその後助役になったんです。バイパス路線にせつかく予算まで付いて測量まで始めたというのに、反対のために県は計画を断念せざるを得なくなつたので、今後のバイパス計画は知らんという

わけですよ、県も国も。往生しましてね。路線が決まるまでに何年もかかりました。それが決まると、太宰府町だけじゃできない、筑紫野市も通ることになったんですよ。それで筑紫野市に行きますとね、ルートを決定するのに筑紫野市の同意があるわけですよ、筑紫野市に、「あなたのところの政争でできなかった道路に、私のところがどうして協力しないといかんのか」って、一番にそれを言われて困りました。反対だつた筑紫野市の原地区に行きましてもそうなんです。それから太宰府の方で説明会を始めましたら、反対反対ですね。筑紫野市ではまた、「あなたのところを反対しているのに、私のところがなぜ協力せにゃいかんのか」って。そういうふうでちよつと一部開通までに二十四年かかりましたね。去年の十一月に開通でしょ。開通してみると大型トラックの通過台数が極端に減りましたね。みんなで道路の新設でそんなに違うもんかと。半分以上になりましたからねえ。関心するやら、ありがたがるやら。

○有馬 反対の主な理由は何だつたんですか。

○有吉 白川団地が反対だつたんですね。立ち退かねばならなかつた。それで三条台団地の北側から分岐して筑紫工業の裏を通つて、今の白川団地を通り農協の横に道を拡幅して、天満宮に近いところは六車線です。西側の一車線を駐車可能な車線に、駐車場対策として、そんな計画だつたんですよ。だから、それができていけば、早くここに幹線道路ができとつた。選挙では反対と賛成に分かれ、反対の急先鋒が川辺町長でした。大差で勝たれたけど、今度はもう県に行つても係長や課長が変わるまでは、バイパスの話は全くできなかったですね。

○有馬 前の経緯を知ってる人はダメなんです。しかし、当時でそういう六車線の道路を作ろうなんていうのは、相当思い切つた計画で

すね。

○有吉 そうですね。だから町のやり方が悪かったですよね。とにかく「いい道路を作るんだから」というふうにですね、少し強引に言い過ぎとりましたね。説明会もあんまりせずに課長に任せたいような形ですね。だから、説明不足という面はあったようですねえ。でも勢いが付くと、もう話を聞いてくれませんかからねえ。

○有馬 やっぱ、そういう大規模な新規事業をやる時には、十分な準備と説明が重要なんですね。

○有吉 そうですね。十分な準備をしていかんと。懸案の国立博物館のアクセスの問題とかねえ。

○有馬 そうですね。あんまり、その話はまだ出てない。

○有吉 まだ出てないでしょう。誘致するだけの話ですけどね、実際にアクセスの問題になつてくると、反対反対になるんじゃないかとね。

○有馬 そうですね、今のあの場所だと、ちょっと。

○有吉 新しい道路ですかね？

○有馬 拡張しないとダメでしょうねえ。

○有吉 だから、どこを拡張するとかどこに新しい工事するとかいうのを少しずつ必要性を訴えながら、そういう調整していかにかいかな。もうすでに、私の所が引つかかるのでしようとか言う人がおるそうですから。

○有馬 ああ、なるほど。

○有吉 そんなところまで、まだ話がいってないという。みんなが知つとるんですね、あの道だけではつまらないと。そうすると、今の道をこう広げるとか、向こうからこう持つてくるべきじゃないかとかね。もう素人考えですね。そういうのが先に先行しますからねえ。

○有馬 県の方は、まだあんまりその辺考えてないんでしょう。

○有吉 いや、県は調査を。

○有馬 やつてます？

○有吉 ええ。太宰府も基礎調査が終わって、ちゃんと冊子もできてます。ただ、どこについている様なことまではいってないですけどね。

○有馬 ああ、なるほどね。

○有吉 それでもだいたいこういうふうなことが考えられるっていう事はできてますからね。そこまでいっていたら、説明してやらにかいかなですよ。

○有馬 地元に対する説明は、まだないわけですね？

○有吉 ところが、太宰府についていう特定がされんもんですからね、市としても……。

○有馬 できないでしょうね。

○有吉 ええ。そこが難しいんですねえ。

○有馬 まだ、おおよそ九州ぐらいってところまでしかいってないからね。

○有吉 太宰府っていう名前がちょっとでもできればですね、説明されるんですけど。

○有馬 だいたいどうなんですか。町長選挙で競争になる時っていうのはですね、どういう原理って事もないんでしょうけども。

○有吉 やっぱ、現職が一番強いんですよ、私に言わせると。もう、回覧板でも何でも名前が出るし、様々な会合にも、全部「こちらから行かしてくれ」っていうわけではなく、「来て挨拶してくれ」って。もうあらゆるグループから誘いがあるでしょう。行って挨拶すると名前と顔は覚えてくれますよ。市民がほとんどね。だから何か市民にとつ

て「あの人がじゃつたらん、新しい人でないとダメだ」って事が何かないですね、私は現職が強いと思うんですよ。だから大きな「戦争」になるのは、やっぱりそれなりの原因があるからですね。「あの人は辞めさせて自分がなろう」とか、「あの人は辞めさせよう、お前なれ」とかいうことになってくるんだらうと思うんですね。私は自分で自分のことを言うのはおかしいけど、そういうふうなことで、現職がよっぽど何か悪いか、あるいはまだいい人がここにいるんだとか、何か一つきっかけがないと難しいんじゃないでしょうか。道路の問題の他にいろいろですね、中村町長さんと助役の川辺さんとの間に、四年間でたまりたまつた物があるんですよ。後から聞かせられましたけど。

○有馬 そうすると、川辺・中村の選挙の時は、有吉さんなんかは農協の重鎮だし、実際には両陣営から働きかけがあつたんじゃないですか？

○有吉 いや、中立でしたね。どっちも動けないんですよ。農協の事業のことを考えますとね。

○有馬 働きかけそのものは？

○有吉 ありましたねえ。

○有馬 あつた？

○有吉 ええ、ありました。しかし、あんたが動いてもらつっちゃ困つて言う人もありました。

○有馬 なるほどねえ。助役さんの仕事つてのは、一番重要なのはどういう事なんですか？

○有吉 そうですねえ、まあ町長の女房役ですから、町長より先を行つちゃいけないし、そうかといって、何から何までというわけにはいかんしですね。町長がやった後をうまく調整して、自分も仕事ができるようにしていかないとダメだし。まず、町長の先を行つちゃいけない

てというのが常に頭の中にありますね。

○有馬 川辺さんつていうのは、どういうタイプの町長さんですか？

○有吉 そうですねえ。あんまり物事にこだわらんですね。大らかな。任せてくれましたから。その点、仕事はしやすかったですね。中村町長はそういうわけにいかんかったようです。

○有馬 自分で何でもかんでも？

○有吉 ええ、何もかも。全部任せるか自分ですか、中途半端はいかんです。任せてくれますと、やっぱり町長をたててですね。何でも相談しながら、指示を受けながらやりますけど。何でもする町長になると、やっぱり反発したくなる様なことがちよいちよい出てくると思うんですよ。そういうことだつたと思います。

○有馬 助役時代の一番大きな仕事つてのは、何だつたんですか？

○有吉 水害ですね。渇水と四十七年と四十八年の大災害ですね。二年続きましたので災害復旧に専念せざるを得ませんし、従つて他の事業は何にもできませんでした。あつちもこつちも手直しせにゃいかん、完全にやりなおさないといかんところがたくさんありましたし。死亡者が十三人でしたからねえ。

○有馬 もうこの頃になると、やっぱり宅地開発の影響が出てるわけですね？

○有吉 はい。そしてその後はどんどん人口が増えたため、小学校、中学校作りばかりでした。一年に小学校と中学校と二つ作つたり、私が助役から町長をしている間に七つでしたもんねえ、小学校と中学校と。買収が済めばだいたい良いんですけど、校区の範囲を決めることと、その中のだいたい中央に用地を選定し、それから買収でしょう。大変でした。

○有馬 やっぱりその頃になると用地取得が大きな問題になるんですか？

○有吉 反対反対がありましてね。小学校作ってもですね。それが一段落して、市庁舎と公民館を作ろう。それを作って一段落というわけです。

○有馬 そうすると災害が問題で学校を作るっていうのは、かなりの程度…。

○有吉 そうですね。小中学校を作るのは簡単にはできませんね。その当時に二十億くらいいったでしょう？

○有馬 もうほとんどそれだけしかできない。

○有吉 ええ。それだけしかできない。

○有馬 ただ、財政的にはどうだったんですか？

○有吉 財政的には、やっぱり当初は苦しかったんですけど、人口が増える度に、少しずつ余裕ができてきました。

○有馬 ちょうどよくなる頃ですかね、財政が。

○有吉 そうでした。火葬場と屎尿処理場とゴミ処理場と三つ。私の時に火葬場は太宰府に作ったんですがね、これが弱りましたね。ゴミは大野城で、火葬場は太宰府が作るから、森山前大野城市長と交渉してですね、ゴミは大野城が引き受けてくれたんです。屎尿はですね、三井郡の北野町が引き受けてくれましたね、大刀洗と北野と小郡と筑紫野と太宰府と両筑衛生組合というものをつくって。これも反対がありましたね。

○有馬 やっぱり、難物ですね。

○有吉 ええ。訴訟問題になりました。訴訟が起きると厚生省が補助金の支出を止めるわけです。これはみんなで首を括らないといかんか

と思いました。機械はすでに発注しており補助金は停止されるわですね。東京まで行って、厚生省に陳情して、切り抜けたというようなこともありました。

○有馬 そういうインフラ整備と言いますか…。

○有吉 ゴミと火葬場と屎尿処理場作ればだいたいですね。火葬場は川辺町長の時でしたが、北谷という所に火葬場をと申し出をしたんですよ。それが、もう反対反対ですね。だから、水城区の有力者から、「北谷が反対するのなら、水城の共有林、部落の共有林を売るから、こっちへ持ってこい」って言われたもんだから、川辺町長がさつと変えちゃったわけです。そうしたら、そこに行くまでに大野城の住宅地が横にある、それを行く途中に水城団地があつたりして、直接共有林には、入られんわけです。みんな反対してですね。もうにっちもさっちもいかんようになったんですよ。北谷は反対したからあんなたち止めたんだろう、我々の所が反対して止められないはずがないと。北谷が止められて、こっちを止められない理屈があるかって言うんですよ。

○有馬 ああ、なるほど。それは理屈ですね。

○有吉 それでどうにもできなくなつて、また北谷ですよ。私になつてから白旗掲げていったんですよ。一度断念して別の所に行つて、そこで反対され、何か月か後にまた北谷にお願いに。「何でも北谷の言うことは聞きます」と頭さげても、一度断念しておるものですから、それでも反対反対ですね。途中で死んだ高田助役が総務課長してたんですよ、自分からすすんで衛生課長に、総務課長が衛生課長になつて、そして北谷説得に行つたんですよ。一週間に十日来いじゃないですけども、とにかく熱心に行きましたね。それでやっとできた

んです。大野城はもうゴミ処理場の工事を始めたんですよ。太宰府としては大野城との約束があるからね、火葬場ができたら、福岡市に頼んでいた火葬場委託にも期限があるから、どこにも持って行かんようになるんですよ。大野城に対しても、ゴミは大野城に持って行って、火葬はうちじゃせんなんていうわけにはいきません。とにかく何でも聞きます。最後に、各戸に補償金のような形で出すのも検討しました。そこで直接出すことは止めにして、北谷が持っている共有林を高く買い上げてね、了承を得たわけでした。

○有馬 なるほどね。川辺さんは一期なんですよ？

○有吉 いや二期やってます。

○有馬 ああ、そうですね。二度目が選挙なかったんですよ。これが二期目ですね。まあ、だいたい二期っていうのは変わらなかったようですね。

○有吉 そうですね。

(3本目A面終了)

○有吉 川辺町長から三期目を断念する話がありました。私を押すグループが、やあやあ言いよるのが聞こえたんですよねえ。

○有馬 それはやっぱり、市議会（市）の中に有吉さんを押す人たちが。

○有吉 そうでしたねえ。

○有馬 そういう動きになってきたら、有吉さんとしては、引き受けざるを得ないと。

○有吉 そうですね。川辺町長の二期目の時からあったんですよ、一期目を終わられるときから。でも私は「戦争」までしたって、結局はしこりを残すということ。

○有馬 川辺さんから有吉さんに変えられるときは、他に対抗馬とか、

そんな動きはなかったんですか？

○有吉 ありました。有吉勘之（勘）というのがですね、ありました。一期目はなかったですけどね。

○有馬 それで、有吉さんが町長時代っていうのは、市制施行っていうのがあるわけですけども、市制へ向けての動きっていうのは具体的に、いつ頃どの辺から出てくるんですか？

○有吉 いやー、昭和五十五年十月一日に国勢調査がありまして、その結果の内示があったのが五十五年の終わりですかね。国勢調査で五万人の確認ができないといけませんから、五年毎しか市に昇格する機会がないわけですけど。五十五年十月の国勢調査で私も四万九〇〇〇人か、四万九五〇〇人、約千人前後は足らんと見てたんですよ。ところが国勢調査では五万二七三人と出たんですよ。我々は住民台帳、基本台帳のだいたいの数から、それくらいではないかと思っていたのに、どうして国勢調査でそんなに千人以上も見込みが違ったか、ということ調べてみたんですよ。そうしたら、短大生がたくさんおるんですよ。その人たちが二十才で卒業するんですよ。こっちに住民票を移しますと故郷での選挙権がなくなるので、親父が持っているなって言うふうで、住民票を移してないのが相当おったわけですね、それに対して国勢調査では現に住んでおれば数に入りますね。それで基本台帳よりも少ないところもあれば、多いところもあって、何百人かは誤差が必ずある。でもそんなにあるとは思ってなかったんですよ、五万二七三人っていうのは。自治省に行きましたら、どうするかって言われたんですよ。というのは五万人になってですね、市に昇格を申請するんですけどね、また五万人を切る所があるんですよ。しかし、市に一回なったらもう一万人でも市ですからね。そういうこと

で、二七三人だったら、五万切るんじゃないかと言うような感じだったらしいんですけどね。実際はそれからまた増えましたけど。私としては、「そんなに急いで市にならんでも、ちょうど一年経てば選挙があるんだから、新しく市制ということ掲げて、選挙で一般に諮った方がいい」というふうに呑気に構えておりました。ところが市議会がですね、「何でもばやつとしてるんだ、五万になったからすぐ市になるよう申請しろ」ということですね。それで、市に申請するような調書をたくさん作らにやいかんわけですよ。それで準備室を急に作りましてねえ。五十六年度いっぱい作り上げて、町議会の議決、県議会の議決の後、国が官報告示をせんと市に昇格ならんわけでしょう。四月までに間に合うために、ずいぶん無理してですね、一年じゃなかなか難しいといわれるところを一年で作り上げてですね。五十七年四月一日に市に昇格したんです。だから、市議員はみんな一年間しか市会議員じゃなかったんですね。町議員じゃなしに、市議員で卒業したかったわけです。みんなやかましかったですね。

○有馬 それはやつぱり、議員さんにとっては、市議員になるってこと自体も、かなり重要な事だったわけですね？

○有吉 新たに選挙で市議員になるかどうか分からんというのに、最後の一年間だけ市議員というのがですね。

○有馬 例えば市に昇格するっていう時は、自治省に書類を持っていった段階では、自治省はあれこれチェックするわけですか？

○有吉 ええ、チェックします。

○有馬 どういう所をチェックされるんですか？

○有吉 連続してる市街地はどれくらいかとかですね。人口だけじゃなしにですね。

○有馬 連続？

○有吉 街並みが連続して続いているところが、市の何%かないといかんとかですね。何かそういうのがたくさんあるんですよ。それで調査に来たんですね、自治省から。

○有馬 やつぱり、そういう対応は、なかなか大変なわけですね？

○有吉 一応調べてですね、これはまあ良かったという事でした。一番心配したのは、福祉事務所を独立して作らないといかんということですね。福祉事務所の職員とそういう関係の人がだいたいぶん増えますので。全国市のうち可児市が五六〇番目で、私達が五六一番目ですね。その年、一緒に二市昇格したものですから、愛知県の可児市まで行きましたかね。可児市の方では、福祉事務所なんてそう大して職員をはりつけてはいないということでした。生活保護世帯は何世帯ですかって聞いたたら、二所帯しかなくて。太宰府は百八十世帯ありましたからね。かなり違うなって思いました。太宰府は少ない方ですよ、それでもね。

○有馬 実際には、市にするっていうのは、今の福祉事務所の話みたいに、行政としては負担が増えるって面があると思うんですけど。あとはどういう事ですか。

○有吉 世論調査をしまして、市に昇格したらいいかと聞くんですけど、圧倒的に市に昇格したらいいっていう意見が多くて、大部分が市になってもらいたいという要望が多かったですね。ほとんどそうでした。その頃から、十ヶ年計画の総合計画なんか作り始めましたし、市の目標としては「史跡と緑豊かな文化のまち」というようなキャッチフレーズで、もうそうとう前からやってきましたし、方向としてはいくつかの柱でやっていこうなんて出していました。

○有馬 市政のマスタープランみたいなものを作るっていう動きは、いつ頃から出てきてましたか？

○有吉 そうですねえ。佐藤さんが作ったのが一番ですね。佐藤勝富⁹⁰さんという職員が企画課長で。

○有馬 どなたが市長の時ですか？

○有吉 川辺さんの時でした。

○有馬 川辺さんの時。だいたいそのときから、基本的な方向っていうのは……。

○有吉 変わってないですね。

○有馬 やっぱ文教都市というか、文化都市というか、そういうコンセプトっていうのは、割と早い時期にあったわけですか？

○有吉 ええ。さつきも言いました中村町長の時ですね。国立博物館を誘致するのもあがってましたねえ。

○有馬 ああ、そうですね。その代わりに県の歴史資料館⁹¹？

○有吉 ええ、そうですね。四十四年でしたか。天神さまの町ですから、しかも史跡がたくさんある。そういう文化っていう面と、学校ももちろん入ってますけどね。それから住宅と。だから、学問の神様がいる学問の町と、とにかく文化財もいっぱいある史跡の町と、それと住宅都市。そういう三本の柱は、中村さんの時からだいたい言ってます。

○有馬 実際、どうなんでしょうねえ。文教都市という場合には、実際に、学校ができるから人間も増えていくわけですけれども、文化っていうのは行政の目玉としては、ある意味で言うくと、直接的ないろんな効果が、直ちにあるわけではないものだと思うんですけどねえ。しかし、割とそういう事って言うのは、行政の中心的なスローガンとし

て、太宰府の場合は浸透しやすかったんですか？

○有吉 天満宮というのが全国的に知れてますからね。

○有馬 はい。

○有吉 「古都太宰府」という、政庁があったというような、観世音寺だとか水城の堤防だとかいう認識は少なかったですね。

○有馬 ええ、そうですね。

○有吉 だから、先人の残した文化財を大切にしようということ、太宰府の政庁の啓蒙啓発を、古都太宰府を守る会と中心になってやりました。当時はですね、太宰府に遺跡があるなんて知らん人が主流で、だいぶん多かったですよね。この頃になってやっとですね、史跡の町というような感じになって。それなら太宰府のことを勉強してみようかっていうような方がだんだん増えてきましたね。そういうふうな文化的な講演会やシンポジウムをしますと相当な人数が集まるでしょう。だから、割と浸透してきたんじゃないかと。

○有馬 やっぱり、新しく入って来られる方にとって……。

○有吉 ええ。まあ一つ太宰府を勉強してみようという人も、それから太宰府を誇りに思う人も、郷土愛ですか、そういうのが新しい住民の方の中にもだんだん定着してきたと。

○有馬 そういう意味でいうと、文化っていうのはある種イメージの問題だから、なんていうか、そういう地域の一体性だとかアイデンティティとかを作っていく上では、いいのかもしれないですねえ。

○有吉 小学校別に見ますとね、不思議に太宰府小学校と水城小学校では史跡とかそういう物に対する関心が少ない。新しい小学校の方が非常に強いですよ。史跡に関する絵とか作文を募集したり、あるいは太宰府という様なことについて感想を求めたりしますとね、そうい

う新しい住民の方が行かれてる学校の方が関心が強い。太宰府小学校と水城小学校は、昔からの当たり前のことだというような感じでね。

○有馬 ああ、なるほどね。そういう意味ではかなり有効に機能してるって言えるんですかね、「古都太宰府」っていうスローガンは。

○有吉 そうですね。

○有馬 そう言えるわけですね。

○有吉 昔は水城堤防のことなど元寇の時に作られたというくらいだった。

○有馬 ああ、そうですか。

○有吉 髭の宮様が来られた時に、「『太宰府』っていう名前はどういう起源ですか」って聞かれたんですが、知らなかったんですよ。それから勉強せにゃいかんと思いましたが、昔からあつたんだよくらいで。

○有馬 しかし、やっぱり自治体の財政がそれだけ文化面に振り分けられる余裕が出てきたっていうのは、かなり大きいでしょうね。

○有吉 確かにそれは言えますね。やっぱり余裕がいくらかかなくて、振り分けようがなかったですよ。そういう予算的に分かるんですけども金がない。今は、もう二百億を早う越しましたからね。考えられないくらいですね。

○有馬 有吉さんの目から御覧になって、今後の太宰府の市政の在り方って言うか、こういうふうに行ったらいいんじゃないかというようなことについては、どういう事になりますか？

○有吉 そうですねえ。やっぱり太宰府らしさ、よそにはない太宰府というものを、これから更に追求していかないといかんのではないかと思うんですね。余裕が出てきますと、そういう面で。太宰府の歴史の細道はですね、そういう意味で太宰府らしい事業と評価しております

す。公園も、児童公園から小さな公園や大きな公園まで、だんだんにできてきましたね。そういう公園の設備なんかは割と進んできたことは大変喜ばしいのですが、反対に小さな路地なんかをもう少しきれいにしてもらえないかっていうような意見もありますね。良くなるところは極端に良くなるもんですからねえ。これからはバランスも考えねばなりませんね。

○有馬 そうですね。昔と違って、投下されるお金が大きいですからね。有吉さんが町長から市長されている頃というのは、そういう意味でいえばある程度インフラが整ってきて、だんだんそういう方向に、予算も振り分けられるようになってきたというか、そういう段階？

○有吉 それは充分ありますね。

○有馬 そういう段階になると、例えば市議会なんかでは、特別大きな争点なんているのは出てきそうにないような気がするんですけど。どうなんですか、その点は。

○有吉 そうですね、ありませんね。同じ様な質疑が繰り返されたりね。質疑がもうほとんど固定化してしまってますね。

○有馬 そういう段階になってくると、市長さんとして必要な資質っていうのも少し変わって来ると、市長さんとして必要な資質って

○有吉 それは変わってこなければいけないと思いますね。ただやはり、特徴あるマチ作りをするためには、ばら撒くんじゃなしに、一点集中で作ってかないと。今の行政は縦割りで、前年の予算に何%積み上げといったようなことばかり聞きますからね。余裕があるっていいにしても、予算を一方的に出すのは難しいんですよ。今は特に不景気で収入が減っておりますし、そういう意味では、余裕があるとは一言も言えんと思うんですけど。今までやってきた行政の継続性ってのは

分かるんですけども。ある一つの事業はだいたいの使命を終えたから、それは一つ削って新しいやつをやろうっていうのがなかなか難しいですね。

○有馬 なるほど。

○有吉 はい。「言うは易く」ですが、なかなか実行は難しいんですよ。しかし、もうそろそろそういう形で整理していかないと、今までのような八方美人的に増加していく財政事情じゃないんじゃないかと、思いますね。だから、市もそういうような形で、切る事を考えながら、新しいことを考えていくということをしていかないといけないんじゃないかなと思うんですね。予算を見ますと、全部膨れ上がっておりますね。

○有馬 そうですね。経済状況からいっても、総花的に全部伸びていくというわけに行かないでしょうね。

○有吉 学校の建設なんかはもう済んだから、そういう予算を何か別の所にパッと回せるかと言ったらそうでもないですね。教育委員会は教育委員会で、前年の予算を減少せずに何とかしようと思って、学校を修理したりですね。今までされなかったから、この機会に予算を回さにかんて言いましたね。だから、いらなくなったから何か新しいことができるかっていったら、そうでもないですね。なかなか難しいですね。ただ議会辺りもそういう発想で援護してくれると、市長もやりやすいでしょうけど。

○有馬 むしろ、今からの市長さんの方が、そういう意味では、ある種哲学がいるというか……。

○有吉 哲学がいるですね、ある意味では難しいと思いますね。何もかも、インフラは整備されており今の市長は結構なもんだという人も

おりますけどね。実際やってみるとそうじゃないと思いますね。質的に違ってこなくちゃいけませんね。

○有馬 その質の違いをどこに求めていくかっていうことが、結局一番問題でしょうね。

○有吉 そうなんです。だから私は、現市政についてですね、「ああしろ、こうしろ」っていうのは、言わんことになっているんですよ。そうせんと、「院政」をひくとかですね、すぐ言われますからね。もう辞めたんだから、なるべくボランティアで協力できる分は協力していく。大きな政治的な発言はしないということです。

○有馬 実際に、そういうケースっていうのは過去にあったんですか。辞められた市長さんが。

○有吉 あるんですよ。

○有馬 あるわけですか？

○有吉 ただみんな短命でした。辞めても長生きしたひとはいなかったですね。意見を聞くとか、なんか難しい問題があるから調整してもらうとかいうことは余り期待できませんでした。全然なかったですね。私は、そういう意味で、現職の時なんか相談される先輩があったらいいなあと思ってました。新しい仕事をする時に必ず反対が出て来るとはいいですね。その反対を市役所の方から説得するのはもちろんですけど、市民の方から協力をする、賛成するという声がちよつともあるとですね、非常に仕事がしやすいんですよ。反対反対っていうときに、賛成っていうのがおりますとね。そういう意味ではですね、大きな声は出さんけれども、民間におつてですね、市長がやりにくくなるときには、何とか助けていかななくちゃいけない、そういう様な相談相手になりたいなあ。だから日頃は市政の批判だとかはしないと、

もう卒業したんだからとそういうふうに割り切っております。

○有馬 そういう意味で、やっぱり、古都大宰府を守る会のような民間団体っていうのは。

○有吉 そうですね。

○有馬 これから役割が重要になってくるでしょうね。

○有吉 そうなんです。だから、そろそろ私も現役市長が辞めて何にも仕事があれば、そういう職を引き継いで譲っていかにかいかなと思っております。

○有馬 古都大宰府を守る会なんて、そういう意味で言えば、日常的に活動しているボランティア団体としては、非常に大きな勢力だと思うんですよね。

○有吉 なかなか民間のよいところを発揮してもらってますね。

○有馬 そういふ今後の市のあり方なんかを考えていく場合にも、行政はもちろんですけど、そういう団体の動きっていうのを担う役割はだんだん大きくなってくるんじゃないでしょうかね。

○有吉 そうですね。行政ではなかなか行き届かない所とか、特に現業は民間に委託するとか、受皿団体の育成は必要でありますし、行政の守備範囲が広くなればなるほど、ボランティア団体の担う役割も大きくなってきます。しかしそういう団体もあまり機構が大きくなりすぎると弊害も出てきますし、難しいところですよ。

○有馬 やっぱり、そういう格好で大きくなりすぎると、今度はそれ自身が官僚機構みたいになっちゃってる。他に何かありませんか、うかがいたいことは。いいですか。じゃあ、どうもいろいろありがとうございます。非常に参加になりました。また、何か分からないことが出てきましたら、おうかがいしたいと思います。

註

- (1) 太宰府天満宮宮司西高辻家。
- (2) 明治三十二年発行の『福岡縣富豪家一覽表』には太宰府町内の富豪が二十三名挙げられ、鬼木姓は鬼木棟才、鬼木忠七、鬼木忠次郎の三名が確認できる。
- (3) 福岡銀行、昭和二十年に十七銀行ほか三行が合併して成立。
- (4) 現春日市、当時は筑紫郡春日村の地域名。
- (5) 明治七年、太宰府村字奥園に宰府小学校として設立、同十年に太宰府小学校と改称、明治四十三年、太宰府町字醍醐（現在地）に移転。
- (6) 現在の福岡県立筑紫丘高等学校の前身。昭和二年筑紫郡三宅村大字塩塚（現福岡市南区）に設立。
- (7) 県立修猷館中学校、現在の福岡県立修猷館高等学校の前身。明治十八年設立。明治三十三年以降早良郡西新町（現福岡市早良区）に位置する。
- (8) 県立朝倉中学校。現在の福岡県立朝倉高等学校の前身。明治四十一年朝倉郡甘木町（現朝倉市）に設立。
- (9) 現在の福岡県立農業高等学校の前身。明治十二年九月、福岡県勸業試験場附設の農学所が起源。明治三十四年に那珂村竹下に移転し、福岡県立福岡農学校、大正十四年より福岡県福岡農学校となる。昭和五十一年に太宰府町に移転。
- (10) 三澤科、ハルピン学院第四代院長（昭和十〜十三年 括弧内の年数は任期を指す、以下同）。東京帝国大学卒業後、渡米して教育学を学ぶ。帰国後、各地の新設中学校の校長を歴任。斬新な教育施策を行ったと評される。
- (11) 政治学者。戦後九州大学教授、長崎大学学長となる。
- (12) 不明。
- (13) 地方自治法を指すと思われる。
- (14) 太宰府町会議員（昭和四〜八年）、太宰府町長（昭和二十二〜二十六年）、のち福岡相互銀行取締役。
- (15) 永光章。
- (16) 有吉重吉太宰府町議會議員（昭和二十二〜二十六年）。
- (17) 西高辻信貞。
- (18) 橋本栄一は、ノモンハン事件を描いた戦時中のベストセラーである草葉栄『アロ高地―ノモンハン戦車殲滅戦記―』（鱒書房、一九四一年）に登場する「橋本少尉」その人である（橋本恭道氏のご教示による）。光明寺は太宰府天満宮門前の馬場町に位置す。

- (19) 太宰府町長（昭和三十〜三十八年）。朝日新聞社社員、満洲同盟通信社社長を勤め、戦後に公職追放となる。当時、友愛塾を開いていた。
- (20) 明治三十五年の菅公御神忌一千年祭を記念して天満宮内に落成。
- (21) 高田保馬、社会学者、経済学者。一定の社会内での結合の総量をほぼ一定しているとする「社会的結合定量の法則」や、自己の力を欲する「力の欲望」によって分業や階級分化を理解する「勢力」説を展開。
- (22) 太宰府町議会議員（昭和二十二〜三十四年）。
- (23) 小笠原八十美か、衆議院農林委員長、日本馬事会評議員。昭和二十四年に太宰府町議会は九州競馬株式会社との競馬場新設計画に対し、誘致陳情を決議している。
- (24) 昭和二十二年に太宰府町水城村学校組合立として水城村大字観世音寺に開校。
- (25) 宮村吉蔵により昭和十六年に設立。のち施設全てが学業院中学校に寄付される。
- (26) 本名権次郎、博多にわかを海外に紹介した斯界の第一人者。
- (27) 『太宰府町誌』の正確な成立時期は不明。明治三十年代と推測されている。
- (28) 現在の八女郡立花町。
- (29) 現在の西日本シティ銀行。前身は西日本無尽で昭和十九年に合併して成立。
- (30) 内藤小太郎、太宰府町議会議員（昭和四十二〜四十九年）。
- (31) 現在の古賀市。
- (32) 大字北谷の小字名。
- (33) 糟屋郡宇美町に位置する。
- (34) 寛政五年、小林作五郎によって創業。
- (35) 昭和四十九年設立、機関誌『都府楼』を発行。平成六年に創立二十周年を契機に現在の財団法人古都大宰府保存協会に改称。有吉氏は平成八年まで理事長をつとめる。
- (36) 尾花國次。
- (37) 亀井光福福岡知事（昭和四十二〜五十八年）、古都大宰府を守る会名誉会長。
- (38) のち九州電力会長。
- (39) 西高辻信稚。信稚の弟が籠門神社宮司の信任、その妻が静子。信任の長男信貞が昭和二十三年に太宰府天満宮宮司を継いだ。
- (40) 宝満山山頂から山麓にかけて所在。

- (41) 日本古文書学会第十四回大会（昭和五十六年六月開催）。
- (42) 今村寛助役（昭和五十九〜平成十一年）。
- (43) 太宰府町議会議員（昭和二十二〜二十六年）。父は小野弥之助太宰府町長（昭和十三〜十七年）。屋号を川口屋という。
- (44) 明治二十九年十月創立、本店は二日市町に位置した。昭和十六年に合併して筑邦銀行となる。
- (45) 明治三十三年九月創立、本店は二日市町に位置した。昭和十六年に合併して筑邦銀行となる。
- (46) 中川アイ太宰府町議会議員（昭和二十二〜二十六年）。
- (47) 衆議院議員（昭和二十二〜二十八、三十〜五十一年）。
- (48) 奥村利雄福岡県議会議員（昭和二十二〜二十六年）。
- (49) 太宰府町議会議員（昭和十二年〜三十年）。
- (50) 太宰府町議会議員（昭和二十六〜三十八年）。
- (51) 太宰府町議会議員（昭和二十二〜二十六年）。
- (52) 太宰府町議会議員（昭和二十二〜二十六年）。
- (53) 太宰府町議会議員（昭和二十二〜二十六年）。
- (54) 太宰府町議会議員（昭和二十二〜二十六年）。
- (55) 三条区長（昭和三十二〜三十四年）。
- (56) 太宰府町議会議員（昭和二十二〜二十六年）。
- (57) 古賀清太宰府町議会議員（昭和三十〜三十四年）。
- (58) 中島香太宰府町議会議員（昭和三十四〜三十八年）。合併前に水城村会議員（昭和二十二〜二十六年）も勤める。
- (59) 太宰府町議会議員（昭和三十四〜三十八年）。
- (60) 太宰府町議会議員（昭和三十四〜三十八年）。
- (61) 太宰府町議会議員（昭和三十〜三十八年）。
- (62) 太宰府町議会議員（昭和三十四〜三十八年）。
- (63) 太宰府町議会議員（昭和三十四〜三十八年）。
- (64) 太宰府町議会議員（昭和三十四〜四十二年）。
- (65) 佐藤善郎太宰府市長（平成七年〜十九年）、佐藤善人太宰府町議会議員（昭和二十六〜三十八年）。
- (66) 武藤益重太宰府町議会議員（昭和三十四〜三十八年）。
- (67) 太宰府町議会議員（昭和三十四〜三十八年）。

- (68) 太宰府町議会議員（昭和三十八～五十年）。
- (69) 小山慶次太宰府町議会議員（昭和四十二～四十六年）。
- (70) 五反田締太宰府町議会議員（昭和四十六～四十九年）。
- (71) 榎寺住宅団地。旧南地区に昭和三十年頃に造成。
- (72) 大字坂本の小字名。
- (73) 西日本鉄道。昭和十七年に九州電気軌道ほか四社が合併して成立。
- (74) 昭和二十三年に遺族会などによって通古賀に開設、同二十五年に水城村に移管、同三十四年に閉鎖され三十五年に資産は売却される。吠、縄、筵などを作っていた。

- (75) 中村義雄太宰府町長（昭和三十八～四十六年）。
- (76) 昭和四十年起工、同四十二年三月竣工。
- (77) 太宰府馬場地区の南側。
- (78) 川辺善郎太宰府町長（昭和四十六～五十四年）。
- (79) 宝蔵とも言い昭和三十四年に建設。重要文化財二十一点を納める。
- (80) 中山正行収入役（昭和六十二～平成三年）。
- (81) 太宰府町議会議員（昭和十七～三十八年）。
- (82) 現在の筑紫台高校の前身。昭和三十二年に設立。太宰府市に位置する。
- (83) 平成八年三月二十二日に九州国立博物館の設置候補地が太宰府に特定される。
- (84) 森山幸雄大野城市長（昭和四十～平成元年）。
- (85) 現久留米市。小郡市の南側に位置する。
- (86) 三井郡大刀洗町。小郡市の東側に位置する。
- (87) 小郡市。筑紫野市の南側に位置する。
- (88) 高田成己助役（昭和五十七～五十八年）。
- (89) この時は出馬せず昭和六十二年の市長選に立候補する。その際は伊藤善佐が当選。
- (90) 佐藤は昭和五十四年～五十八年まで企画課長を勤める。当時は高田成己が同課長を勤めている（昭和四十四年～四十七年）。
- (91) 九州歴史資料館、昭和四十七年発足。

参考文献

- 福岡県立朝倉高等学校編『創立五十年史』（福岡県立朝倉高等学校、一九五九年）
- 『修猷館二百年史』（修猷館二〇〇年記念事業委員会、一九八五年）

哈爾濱学院史編集室編『哈爾濱学院史―一九二〇～一九四五―』（国立大学哈爾濱学院同窓会、一九八七年）

森弘子『西高辻信貞 わがいのち火群ともえて』（太宰府天満宮、一九八八年）

上沼八郎『実録はっさい先生』（共同出版株式会社、一九八八年）

百十年誌編集委員会編『耕―福農百十年誌―』（福岡県立福岡農業高等学校、一九八九年）

『財団法人古都大宰府を守る会設立二十周年記念 古都大宰府―保存への道―』（財団法人古都大宰府を守る会、一九九四年）

福岡県立筑紫丘高等学校創立七十周年記念誌編集委員会編『福岡県立筑紫丘高等学校創立七十周年記念誌』（福岡県立筑紫丘高等学校、一九九七年）

陶山鐵也・和田學・松田信・竹森淳編『とおのこが風土記』（太宰府市通古賀区、二〇〇三年）

『追想具鳥兼三郎』刊行委員会編『追想具鳥兼三郎―良心を枉げて易きにつく者は悔いを千載に残す―』（菘書房、二〇〇六年）

九州歴史資料館編『観世音寺』（九州歴史資料館、二〇〇六年）

◎辞典類

『国史大辞典』全十五巻（吉川弘文館）

西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部編『福岡県百科事典』上下巻（西日本新聞社、一九八二年）

『角川日本地名大辞典 四〇福岡県』（角川書店、一九八八年）

『事典昭和戦前期の日本―制度と実態―』（吉川弘文館、一九九〇年）

『事典昭和戦後期の日本―占領と改革―』（吉川弘文館、一九九五年）

有限会社平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系第四一巻 福岡県の地名』（平凡社、二〇〇四年）

◎太宰府市刊行物ならびに所蔵資料

『太宰府市史』全十三巻十四冊（太宰府市）

『広報だざいふ』（太宰府市）

『議会だより』（太宰府市議会議事事務局）

『大正五年起議員吏員区長委員名簿』（太宰府市役所所蔵）

太宰府町役場企画課編『太宰府 合併20周年記念広報特集号』（一九七五年）